

清武町埋蔵文化財調査報告書 第17集

KAMIINOHARU

上猪ノ原遺跡－4－

SIMOINOHARU

下猪ノ原遺跡－2－

県営農地保全整備事業船引工区にかかる埋蔵文化財調査概要報告書

2005

清武町教育委員会



巻頭図版 上猪ノ原遺跡第4地区・下猪ノ原遺跡第2地区（北西から）

序

本書は、清武町船引地区で進められている県営農地保全整備事業に伴い、平成15・16年度に発掘調査を行った上猪ノ原遺跡（第4地区）・下猪ノ原遺跡（第2地区）の発掘調査概要報告書です。

本調査では、今から約7000年前から約9000年前の縄文時代早期の資料を中心として、幅広い時期にわたる人々の生活の痕跡が数多く確認されましたが、なかでも約2万年前の礫群や古代の掘立柱建物群などはそれぞれの時代の研究史上で貴重な資料となっています。

今後、これらの貴重な文化遺産が、地域における歴史文化の解明や21世紀を担う子供たちへ着実に継承されるとともに、子供たちの豊かな心を育む教育の場の生きた資料となることができれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査を実施するに当たり、多大な御協力をいただきました船引土地改良区をはじめとする地域の皆様並びに関係各局に対し、心より厚く御礼申し上げます。

平成17年 3月

清武町教育委員会

教育長 神 川 孝 志

例 言

1. 本書は、県営農地保全整備事業（船引工区）に伴い、平成15・16年度に実施された上猪ノ原遺跡（第4地区）・下猪ノ原遺跡（第2地区）の発掘調査概要報告書です。

2. 調査組織は以下のとおりである。

調査主体 清武町教育委員会
事務局

教 育 長 湯 地 敏 郎（～04.5）

神 川 孝 志（04.8～）

教 育 次 長 北 岡 義 朗（～04.7）

鑑 和 俊（04.7～）

社会教育課長 松 元 一 夫

社会教育課長補佐 平 松 三 郎（～04.7）

社会教育係長 伊 東 但

社会教育課主任 井 田 篤

調査員

社会教育課主任 井 田 篤

社会教育課主事 秋 成 雅 博

社会教育課嘱託 富 田 卓 見（平成15年度）

社会教育課嘱託 若 杉 知 和（平成16年度）

社会教育課嘱託 草 野 美 香（平成16年度）

3. 現場における測量・実測については、井田・秋成・富田・若杉・草野及び実測補助員が行った。

実測補助員・

(50音順)

4. 遺物の整理及び報告書作成業務については、井田・秋成・富田・若杉及び整理作業員が清武町埋蔵文化財センターで行った。

整理作業員・

(50音順)

5. 本書で使用した写真については、現場における撮影は井田・秋成・富田・若杉が行い、空中写真については(株)スカイサーベイに委託した。また、遺物撮影については、井田・秋成・若杉が清武町埋蔵文化財センターで行った。

6. 本書で使用した土層及び土器の色調等は、『新版 標準土色帖（1997年後期版）』の土色に準拠した。

7. 本書で使用した方位は磁北で、レベルは海拔絶対高である。

8. 本書に使用した記号は次のとおりである。

S A : 竪穴式住居跡 S B : 掘立柱建物 S C : 土 坑 (炉穴・陥し穴も含む)

S E : 溝状遺構 S I : 集石遺構 S Z : 埋設土器

9. 本書の執筆と編集は、井田・秋成が担当した。文責については本文目次に記した。

10. 出土遺物その他諸記録は、清武町埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

第Ⅰ章	はじめに	(文責 井田)	1
第1節	調査に至る経緯		1
第2節	立地と環境		1
第Ⅱ章	上猪ノ原遺跡第4地区	(文責 井田)	5
第1節	調査の概要と基本層序		5
第2節	アカホヤ火山灰層上面の調査		6
	■掘立柱建物群		
第3節	アカホヤ火山灰層下面の調査		8
	■埋設土器		
	■土坑		
	■集石遺構		
	■陥し穴状遺構		
	■礫群		
	■出土遺物		
第4節	まとめ		13
第Ⅲ章	下猪ノ原遺跡第2地区	(文責 秋成)	18
第1節	調査の概要と基本層序		18
第2節	アカホヤ火山灰層上面の調査		19
第3節	縄文時代早期の調査		20
	■集石遺構		
	■炉穴		
	■陥し穴状遺構		
	■埋設土器		
	■縄文時代早期の包含層出土遺物		
第4節	旧石器時代の調査		27
第5節	まとめ		28
調査抄録			32

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡位置図	2	第 15 図	下猪ノ原遺跡第 2 地区 4 層上面	19
	(S=1/25000)			遺構配置図	
第 2 図	遺跡周辺地形図	3・4		(S=1/400)	
	(S=1/1000)		第 16 図	下猪ノ原遺跡第 2 地区縄文時代	20
第 3 図	上猪ノ原遺跡第 4 地区基本土層図	5		早期遺構配置図	
	(S=1/30)			(S=1/400)	
第 4 図	遺構配置図①	7	第 17 図	集石遺構実測図	21
	(S=1/500)			(S=1/30)	
第 5 図	SC-4実測図	9	第 18 図	炉穴 (SC-29) 実測図	22
	(S=1/40)			(S=1/40)	
第 6 図	SI-12実測図	11	第 19 図	陥し穴状遺構 (SC-16) 実測図	22
	(S=1/30)			(S=1/40)	
第 7 図	SI-13実測図	11	第 20 図	SZ-1実測図	23
	(S=1/30)			(S=1/10)	
第 8 図	SI-37実測図	11	第 21 図	SZ-1出土遺物実測図	23
	(S=1/30)			(S=1/10)	
第 9 図	SC-8実測図	11	第 22 図	SZ-2実測図	24
	(S=1/30)			(S=1/10)	
第 10 図	遺構配置図②	12	第 23 図	SZ-2出土遺物実測図	24
	(S=1/500)			(S=1/10)	
第 11 図	遺物分布図	14	第 24 図	下猪ノ原第 2 地区出土遺物実測図①	25
	(S=1/500)			(S=1/3)	
第 12 図	出土遺物実測図①	15	第 25 図	下猪ノ原第 2 地区出土遺物実測図②	26
	(S=1/3)			(S=1/3・2/3・1/2)	
第 13 図	出土遺物実測図②	16	第 26 図	礫群(SR-1)実測図	27
	(S=1/3)			(S=1/30)	
第 14 図	下猪ノ原遺跡第 2 地区土層模式図	18	第 27 図	下猪ノ原第 2 地区出土遺物実測図③	27
	(S=1/30)			(S=2/3)	

図 版 目 次

図版 1	上猪ノ原遺跡第 4 地区全景	1	図版 16	SR-1	13
図版 2	下猪ノ原遺跡第 2 地区全景	1	図版 17	上猪ノ原遺跡第 4 地区出土遺物	17
図版 3	上猪ノ原遺跡第 4 地区基本土層	5	図版 18	SB-1	29
図版 4	柱穴群検出状況	6	図版 19	SI-6	29
図版 5	SB1～3	6	図版 20	SI-10	29
図版 6	SB5	6	図版 21	SI-15	29
図版 7	検出状況	8	図版 22	SI-17	30
	(埋設土器)		図版 23	SC-29 (ブリッジ)	30
図版 8	断面確認状況	8	図版 24	SC-16	30
	(埋設土器)		図版 25	SC-29	30
図版 9	復元状況	8	図版 26	SZ-1	30
	(埋設土器)		図版 27	SZ-2	30
図版 10	SC-4 遺物出土状況	9	図版 28	石器埋納遺構?	30
図版 11	SC-4	9	図版 29	SR-1	30
図版 12	SI-12	10	図版 30	下猪ノ原遺跡第 2 地区出土遺物	31
図版 13	SI-13	10			
図版 14	SI-37	10			
図版 15	SC-8	10			

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

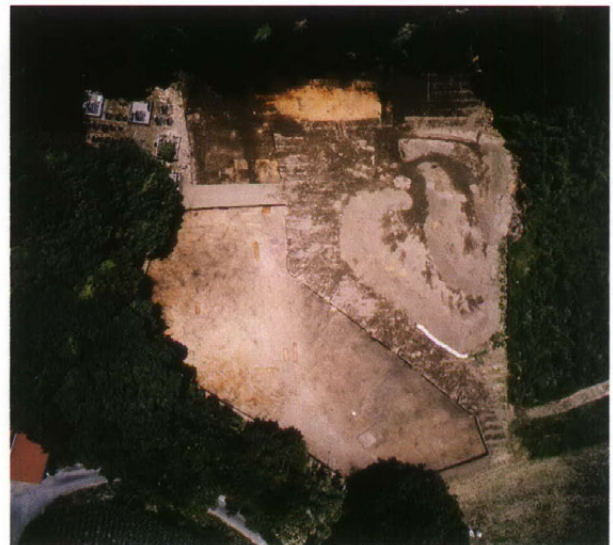
平成 7 年度より実施されている県営農地保全整備事業（船引工区）に伴い、事業区に上猪ノ原遺跡及び下猪ノ原遺跡の一部が含まれることが明らかになった。遺跡の取り扱いについて、宮崎県教育委員会、宮崎県中部農林振興局、船引地区土地改良区、清武町教育委員会等関係各局で協議したところ、やむを得ず削平などにより遺跡の現状保存が困難な事業区について、宮崎県中部農林振興局の委託を受け、清武町教育委員会が発掘調査を実施することとなった。調査期間は、上猪ノ原遺跡（第 4 地区）が平成 15 年 9 月 22 日から平成 16 年 7 月 23 日まで、下猪ノ原遺跡（第 2 地区）が平成 16 年 4 月 26 日から平成 17 年 2 月 17 日までで、調査面積は上猪ノ原遺跡（第 4 地区）が約 1300m²で下猪ノ原遺跡（第 2 地区）が約 1200m²である。

第 2 節 立地と環境

清武町は宮崎平野部の南西部に位置し、県都宮崎市に隣接している。両遺跡は町内北西部の船引地区に所在し、町内を流れる清武川左岸の標高約 60～65m のシラス台地上に立地している。当台地上では 1990 年代前半から、県営農地保全整備事業や東九州自動車道建設に伴う発掘調査が連続して実施されており、上ノ原遺跡・白ヶ野遺跡・滑川遺跡・山田遺跡・坂元遺跡など約 20 遺跡で貴重な資料が相次いで確認されている。



図版 1 上猪ノ原遺跡第 4 地区全景

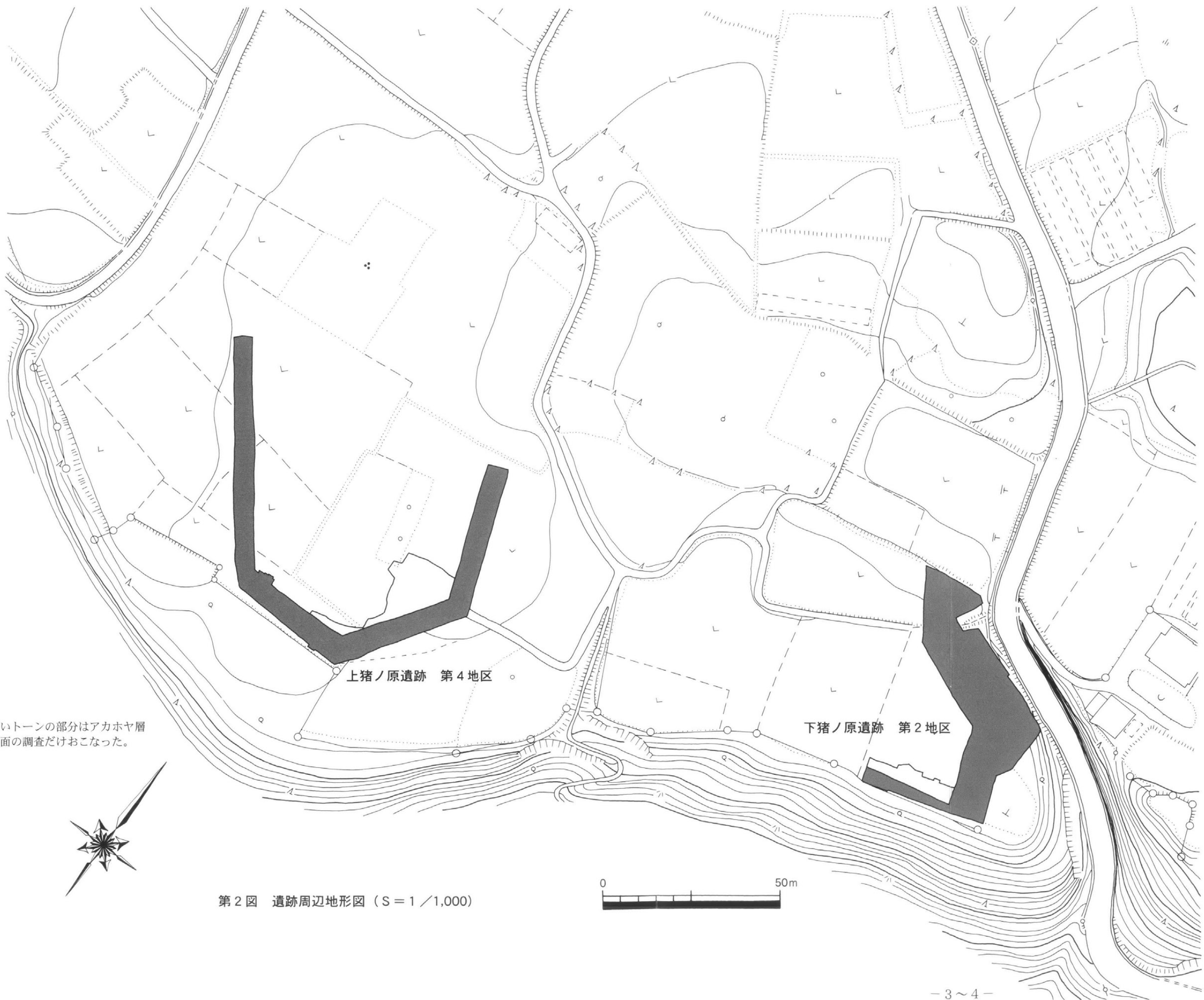


図版 2 下猪ノ原遺跡第 2 地区全景



- | | | | | |
|------------|------------|------------|------------|------------|
| 1. 上ノ原第1遺跡 | 2. 上ノ原第2遺跡 | 3. 上ノ原第3遺跡 | 4. 上ノ原第4遺跡 | 5. 白ヶ野第3遺跡 |
| 6. 白ヶ野第2遺跡 | 7. 白ヶ野第4遺跡 | 8. 白ヶ野第1遺跡 | 9. 滑川第1遺跡 | 10. 滑川第2遺跡 |
| 11. 滑川第3遺跡 | 12. 山田第1遺跡 | 13. 山田第2遺跡 | 14. 坂元遺跡 | 15. 坂元第2遺跡 |
| 16. 上猪ノ原遺跡 | 17. 札立第2遺跡 | 18. 札立第1遺跡 | 19. 下猪ノ原遺跡 | 20. 園田遺跡 |
| 21. 権現原遺跡 | 22. 杉木原遺跡 | 23. 竹ノ内遺跡 | 24. 清武城跡 | |

第1図 遺跡位置図 (S = 1/25,000)



薄いトーンの部分アカホヤ層
上面の調査だけおこなった。

第2図 遺跡周辺地形図 (S = 1 / 1,000)



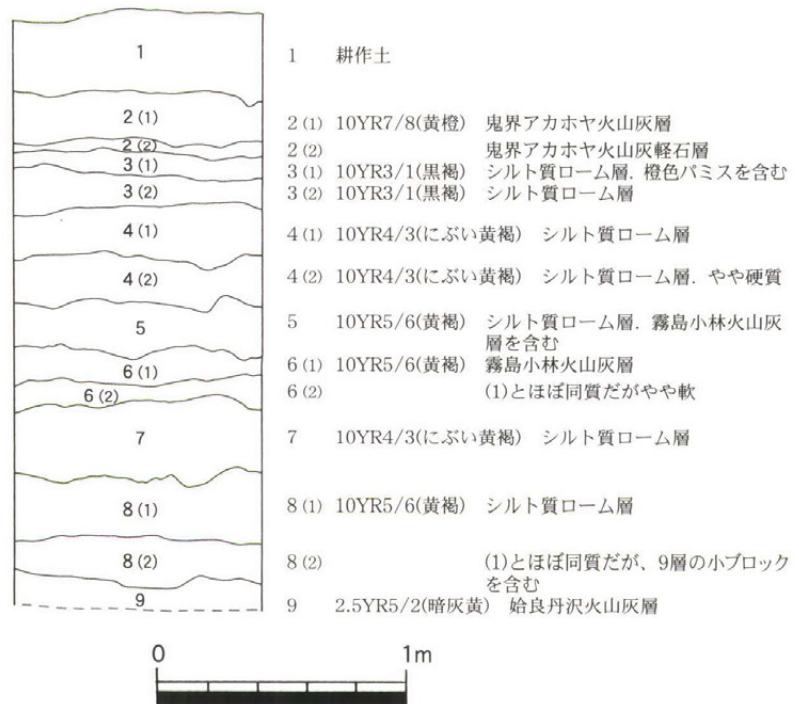
第Ⅱ章 上猪ノ原遺跡第4地区

第1節 調査の概要と基本層序

当調査区は、県文化課の試掘調査により、遺跡の密度が極めて濃い範囲であることが確認されたため、出来る限りの現状保存を前提に開発部局と協議を行なった。その結果、新たに造成される畑の外周道路及び水路予定地のみで調査を実施することとなった。

調査はまず重機による表土の剥ぎ取りから行い、続いてアカホヤ火山灰層上面で遺構の検出作業を行った（縄文時代前期以降）。その結果、掘立柱建物5棟と土坑2基が確認されたため記録作業を行い、その後アカホヤ火山灰層を重機により除去した。次に縄文時代早期及び草創期の包含層である第4・5層（第3図 上猪ノ原遺跡第4地区基本土層図 参照）を人力で掘り下げていったが、多量の焼礫と遺物が出土するとともに35基の集石遺構・2基の陥し穴・5基の土坑、そして、埋設土器が1例確認された。遺物の取り上げ作業や焼礫及び各遺構の記録作業終了後、旧石器時代の包含層である第6層から第8層まで人力で掘り下げていったところ、第7・8層で石器が出土し、その他には第8層最下部で礫群が2基確認された。これら旧石器時代の調査終了をもって全調査を終了した。

*本章で使用されている層位については、下記の第3図上猪ノ原遺跡第4地区基本土層図参照。



図版3 上猪ノ原遺跡第4地区基本土層

第3図 上猪ノ原遺跡第4号地区基本土層図S2 (1/30)

第2節 アカホヤ層上位の調査

調査区の大部分においてアカホヤ火山灰層が残存していたため、アカホヤ火山灰層上面で遺構の検出作業を行なったところ、多数の柱穴と2基の土坑が確認された。2基の土坑については、現在出土遺物を検討中で使用時期及び用途は不明である。

■掘立柱建物群

現在多数の柱穴を各々のプラン（直径・深さ等）・埋土及び配列から検証し、“何棟の”“どんな”掘立柱建物が存在したのかを検討中であるが、今のところ5棟の存在が確認されている。

SB-1～3

SB1～3については、最も複雑に柱穴が検出されており、何棟の建物が構築されていたのかまだまだ検討が不十分ではあるが、北東-南西5間×北西-南東2間（柱間は2～2.5m）のSB-1・2と、北東-南西4間×北西-南東3間（柱間は2～2.5m）のSB-3計3棟が今のところ確認されている。ただし、建て替えや庇の有無など今後の検討課題は多く、柱穴から出土した遺物とあわせて構造及び構築時期を解明していきたい。

SB-4

北東-南西2間（柱間は約2m）×北西-南東2間（柱間は約1.5m）の掘立柱建物である。他の4棟と比較すると、柱穴のサイズや埋土及び建物の向きなど相違点が多く、異なる構築時期であった可能性も考えられる。

SB-5

北東-南西5間×北西-南東2間（柱間は2～2.5m）の掘立柱建物で、SB-1・2と柱穴のサイズや埋土及び建物の向きがよく似ている。又、母屋に庇が取り付けられていた可能性が考えられる柱穴も確認されているが、これについては今後のさらなる検討が必要である。



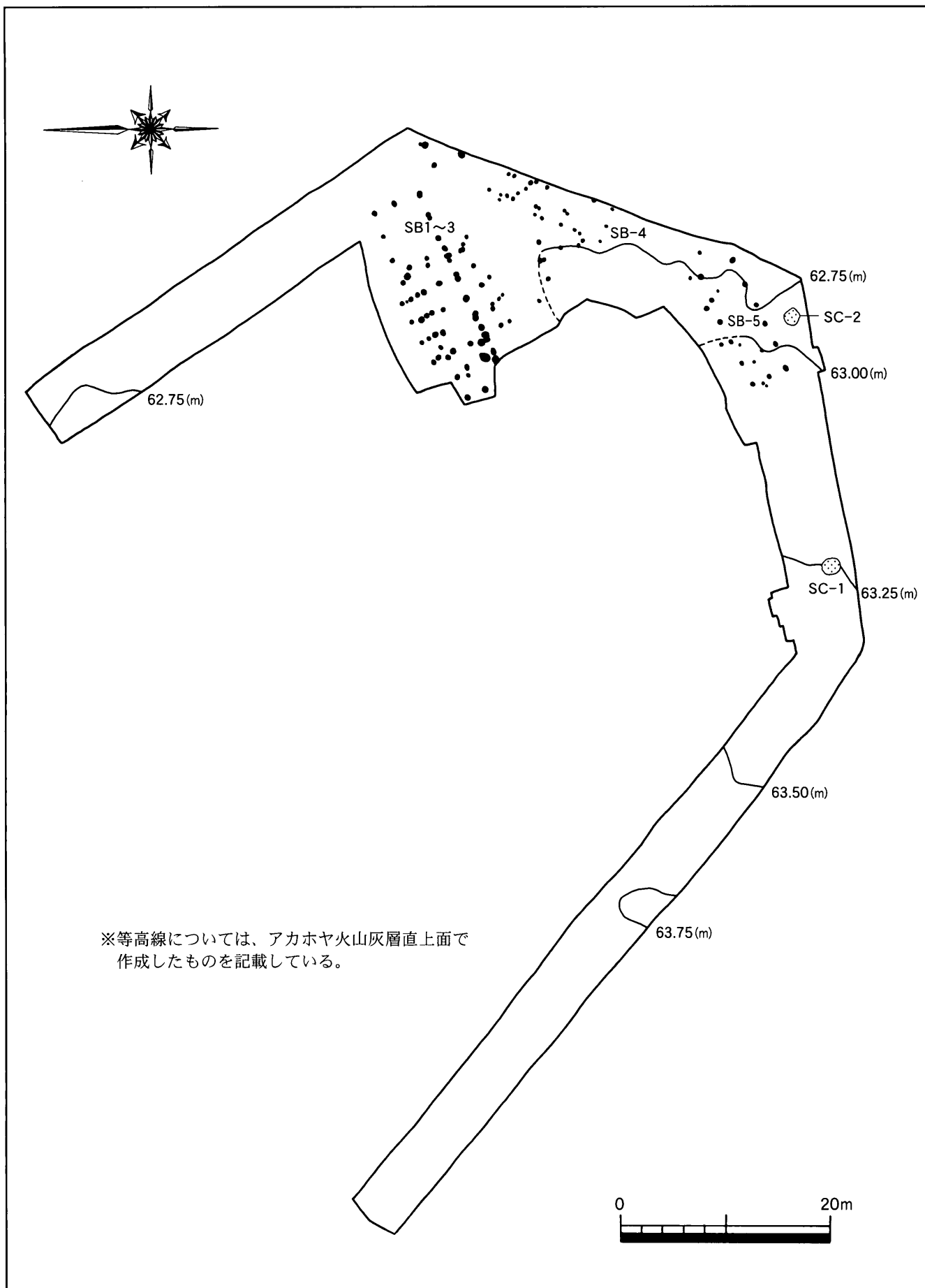
図版4 柱穴群検出状況



図版5 SB1～3



図版6 SB5



第4図 遺構配置図1 (S = 1 / 500)

第3節 アカホヤ層下位の調査

アカホヤ火山灰層除去後、第4・5層を掘り下げていったところ、焼礫が14,750点、土器・石器など縄文時代早期（草創期もわずかに含む）の遺物が2,850点出土した。焼礫及び遺物は第4層上位から出土をはじめ、最も多量に出土したのは第4層下位から第5層中位にかけてであった。焼礫及び遺物の出土がピークをむかえるころ、集石遺構や陥し穴そして土坑が検出されはじめたが、焼礫と遺物の出土量があまりに多かったため少し検出面を下げて記録作業を行った。

縄文時代早期の調査終了後、人力で第6層～第8層を掘り下げていったが、第7・8層で焼礫が40点、石器が約300点の出土し、又第8層最下部（＝第9層直上）では礫群が2箇所確認された。

■埋設遺構

焼礫や集石遺構が特に集中する範囲のほぼ中央で、深鉢の口縁部付近がほぼ一周する状況が確認された。検出の際には掘り込みのプランは確認できなかったが、検出面を若干下げ、なおかつトレンチで断面を確認したところ、土器より直径がひとまわり大きく土器の器高の2/3以上の深さを持つ掘り込みが確認された。

出土した土器は下剥峯式土器の深鉢で、器高約30cm・口径約35cm・底径約15cmであるが、現時点では復元作業が十分ではないので、あくまでも参考データである。



図版7 埋設土器検出状況



図版8 断面確認状況



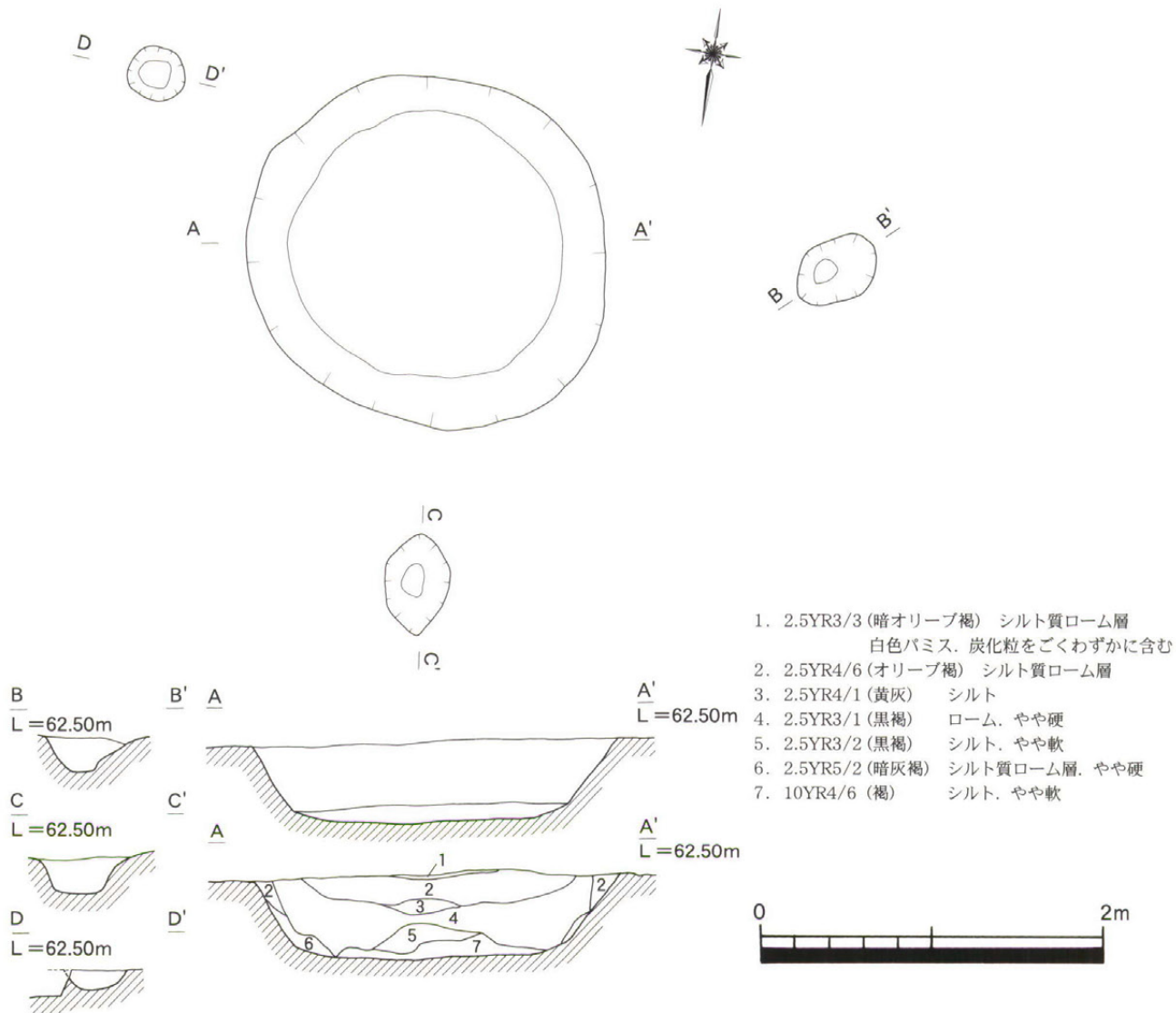
図版9 復元状況

■土坑

第5層中位で5基の土坑が検出された。用途についてはいずれも不明であるが、なかでも注目されるのはSC-4である。

SC-4

平面プランは直径約2mの円形で、検出面からの深さは約0.45mであった。埋土中には焼礫と押型文土器や下剥峯式土器などの縄文時代早期中葉の土器が入り込んでいたが（図版10参照）、いずれも使用後に流れ込んだ可能性が高いものではないかと推測される。又、床面については水平であるが、ピットは確認されていない（図版11参照）。但し、SC-4から0.6m～1mほど離れたところに、直径約0.5m、検出面からの深さ約0.25mのピットが3個（第5図参照）確認されているので、この3個のピットがSC-4の構造になんらかの関係があった可能性があることも考慮したうえで遺構の用途を解明していきたい。



第5図 SC-4実測図 (S = 1/40)



図版10 SC-4遺物出土状況



図版11 SC-4

■集石遺構

第4層下位から第5層中位にかけて、35基の集石遺構が検出された。35基すべてが掘り込みを持っており、又そのうち7基については、掘り込みの底面付近に人頭大の扁平な礫が1個から数个配置してあった。断面形状についてはボウル状もしくは浅皿状のものが多く、V字のものはSI-12（図版12・第6図参照）のみであった。

集石遺構の規模については、白ヶ野第1遺跡や滑川第1遺跡などで確認されたような超大型のもの（直径が2m以上で深さが1m以上の掘り込みを持ち、そのなかに多量の焼礫が入っているタイプ）は検出されていない。

集石遺構と焼礫の関係については、焼礫の出土が多い範囲で多数の集石遺構が検出されるケースがほとんどであった。

■陥し穴状遺構

第4層下位から第5層中位にかけて、2基の陥し穴状遺構が確認された。検出時の平面プランはいずれも楕円形であるが、霧島・小林火山灰層上面での平面プランは長楕円形へと変化する（図版15参照）。すなわち、比較的掘り易い第4・第5層では大きめの穴を丸く掘り、硬くて作業しにくい霧島・小林火山灰層から下位については狭く細長い穴を掘ったと考えられる。これは作業効率及び獲物を捕獲した後の状況（逃げられることを防ぐ）を重視した構造といえよう。又、深さについては検出面から約1.6mで、いずれも底面に2個の逆茂木を配置している。

今回確認された2基の陥し穴状遺構については、上猪ノ原遺跡第3地区で台地縁辺部に約17mの間隔で3基が並んで検出されたものと構造がよく似ている。又構築されている場所も3基が設置してある延長線上である可能性が高いことから、当台地縁辺部に仕掛けられるトラップの一つのパターンを検証するうえで、両地区を一つの領域としてとらえて考察を進めていきたい。



図版12 SI-12



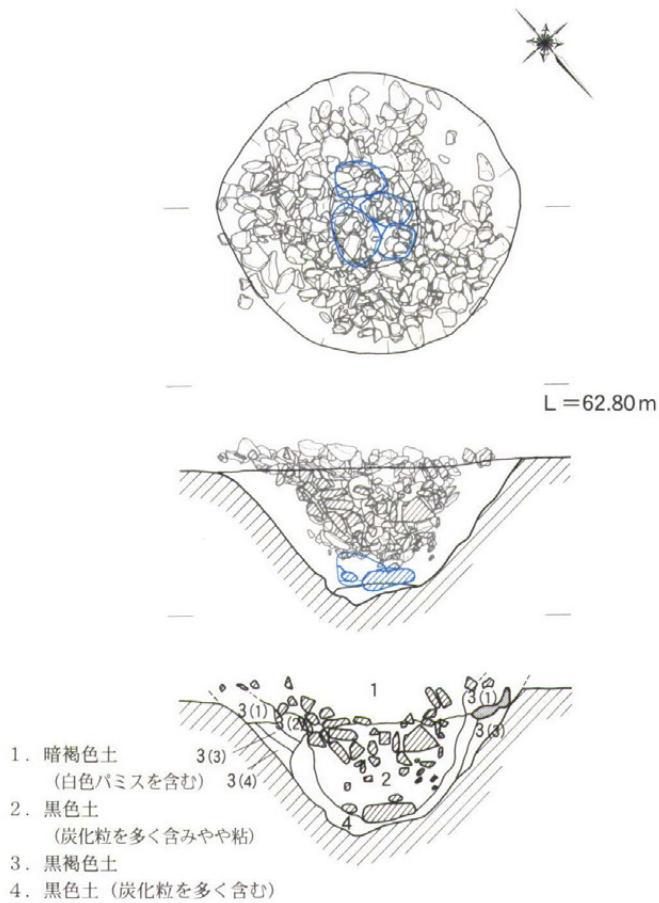
図版13 SI-13



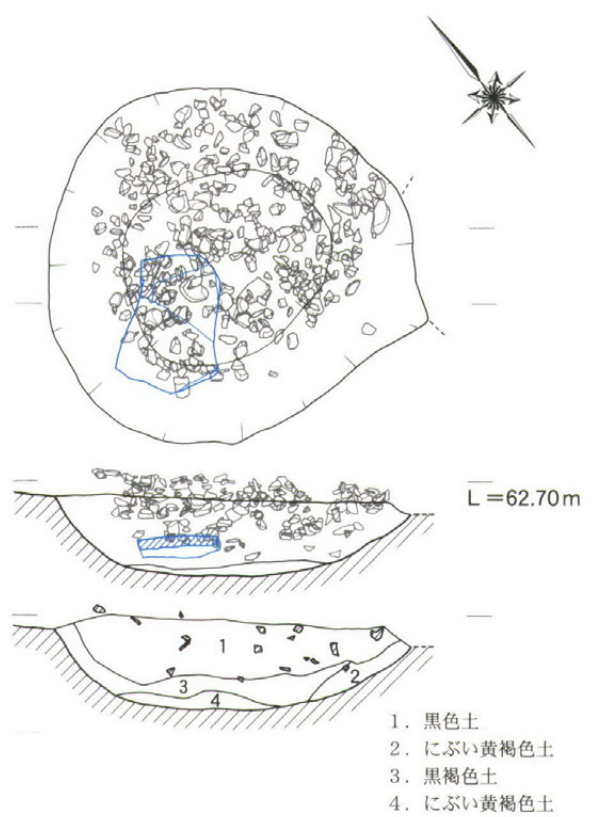
図版14 SI-37



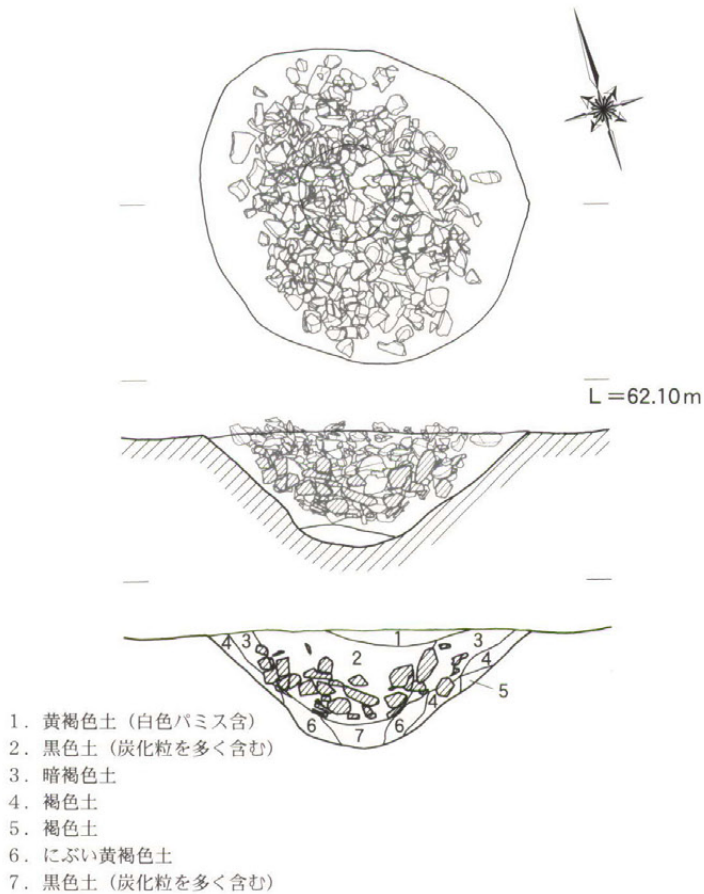
図版15 SC-8



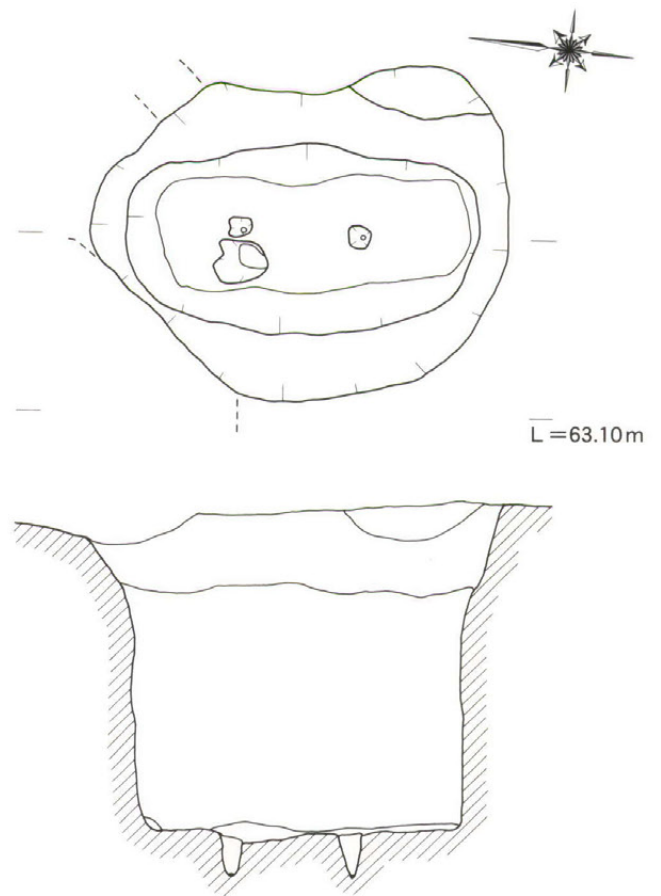
第6図 SI-12実測図 (S=1/30)



第8図 SI-37実測図 (S=1/30)

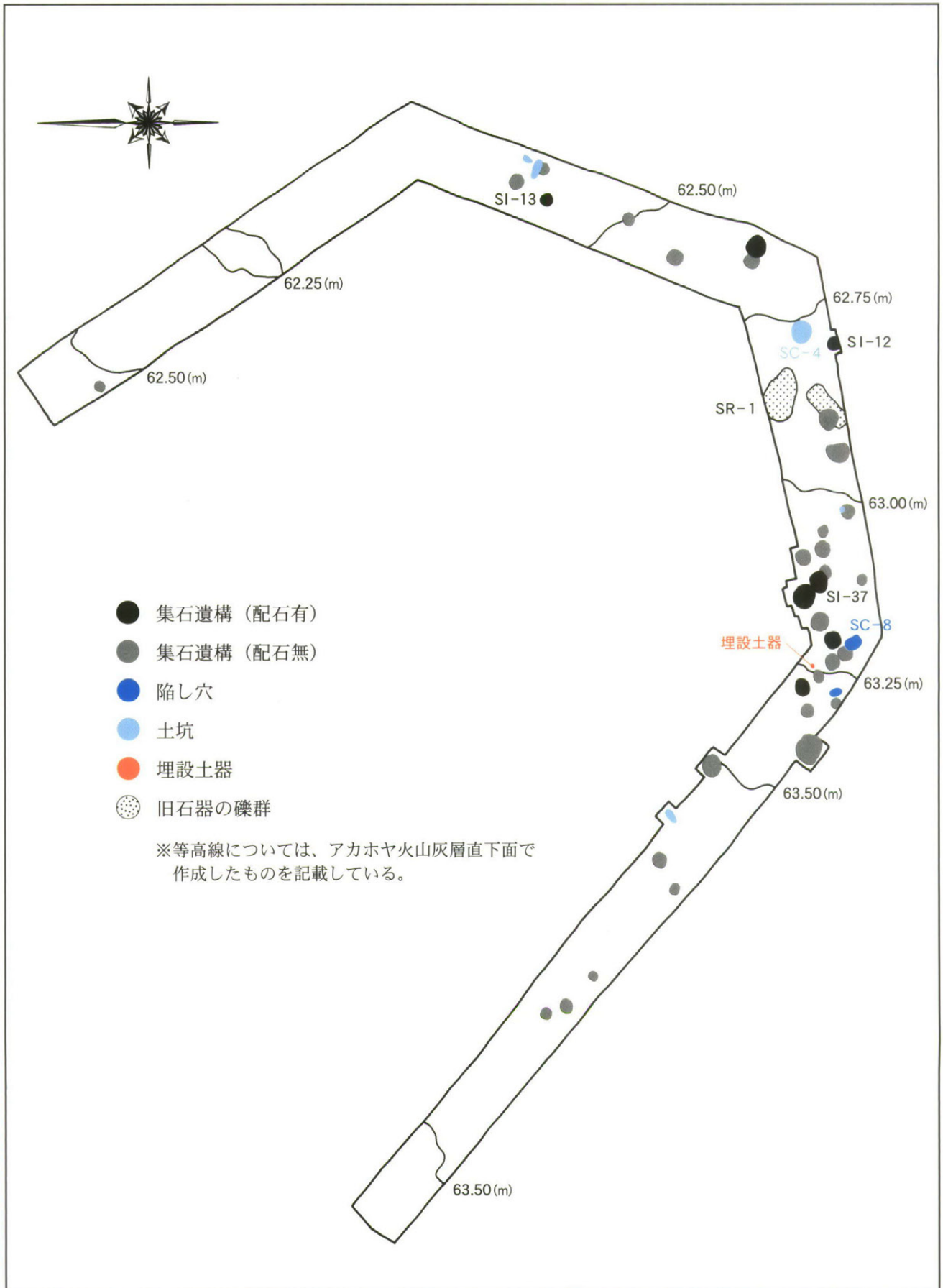


第7図 SI-13実測図 (S=1/30)



第9図 SC-8 (S=1/30)





第10図 遺構配置図2 (S = 1 / 500)

■礫群

第8層最下部（＝第9層直上）で礫群が2箇所確認された（SR-1・2）。

SR-1

拳大の焼礫214個が、約5m×約3mの範囲に平面的に広がっていた。（図版16参照）

SR-2

拳大の焼礫115個が、約5m×約2mの範囲に平面的に広がっていた。



図版16 SR-1

■出土遺物

縄文時代早期の土器については、前平式土器・知覧式土器・桑ノ丸式土器・下剥峯式土器・押型文土器・平椀式土器・塞ノ神式土器・鎌石橋式土器など、早期中葉から後葉にかけてのものが出土している。又、石器については、石鏃（黒曜石・チャートなど）・トトロロ石器（チャート）・石匙（チャートなど）・尖頭器（黒曜石）・石斧（頁岩・砂岩など）・石核（砂岩・頁岩など）・叩石（尾鈴酸性砂岩など）・磨石（砂岩など）・スクレーパー（頁岩など）・ハンマーストーン（砂岩など）などが出土している。

旧石器時代の石器については、ナイフ形石器（砂岩）が2点、剥片石器（砂岩製や頁岩製など）が数十点出土している。*石器の（ ）については、石材を記載している。

第4節 まとめ

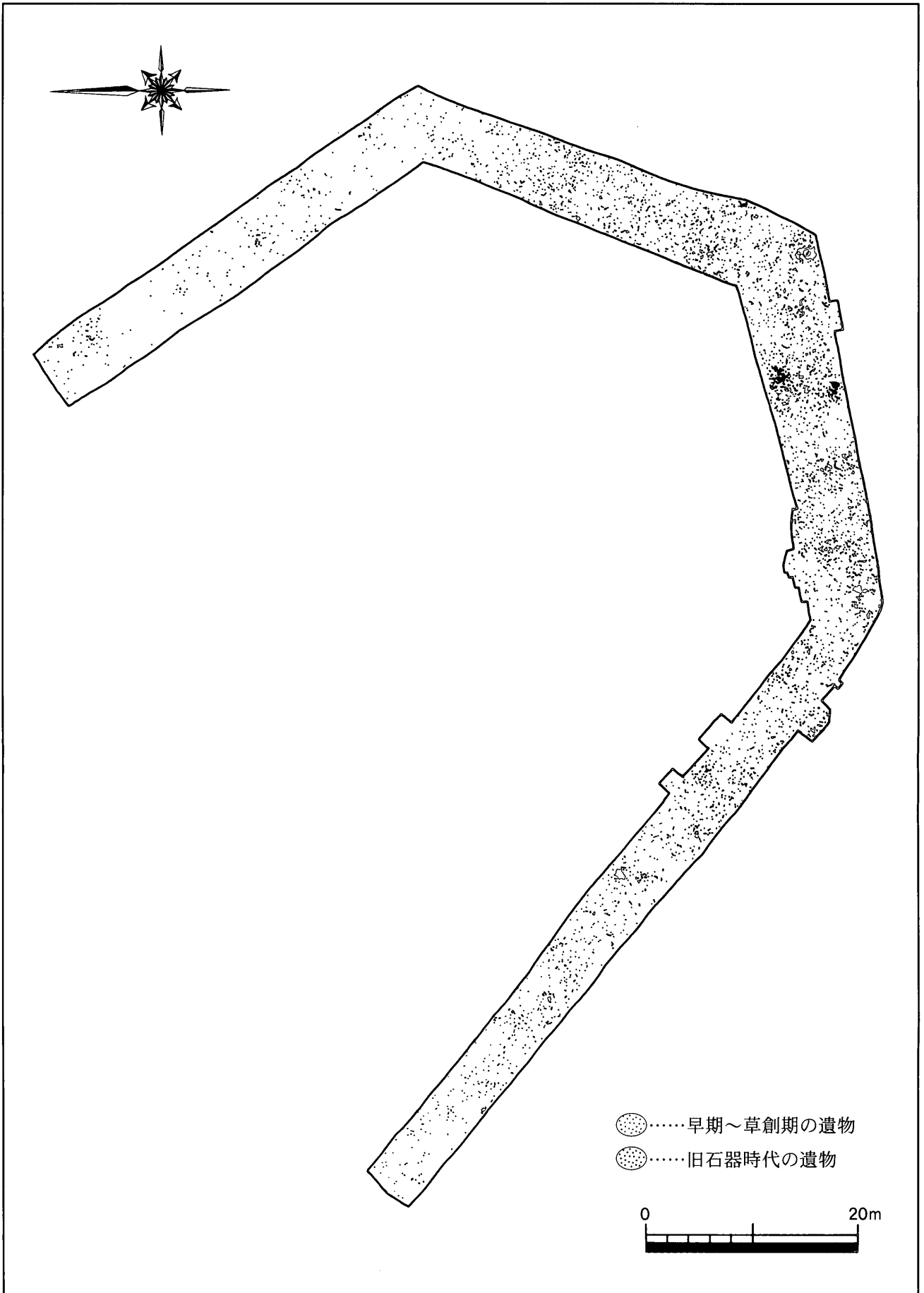
今回の調査では、3枚確認されている文化層全てにおいて貴重な資料を得ることができたといえる。

まずアカホヤ火山灰層上位においては、多数の柱穴が検出され、現在のところ5棟の掘立柱建物が確認されている。当遺跡は先述のとおり町内船引地区に所在しているが、この船引地区については建久8年に作成された『建久の図田帳』にその地名がみられることから、古代末から中世初頭にかけて宇佐八幡宮ゆかりの勢力によって既に開発が進められていたことが想定される。そこで船引地区を眼下に見下ろす台地縁辺部に立地するこの掘立柱建物群が、この勢力となんらかの関係があったのではないかと推測されるが、今後予定している範囲（第4地区に隣接している）の調査終了後に再度検討していきたい。

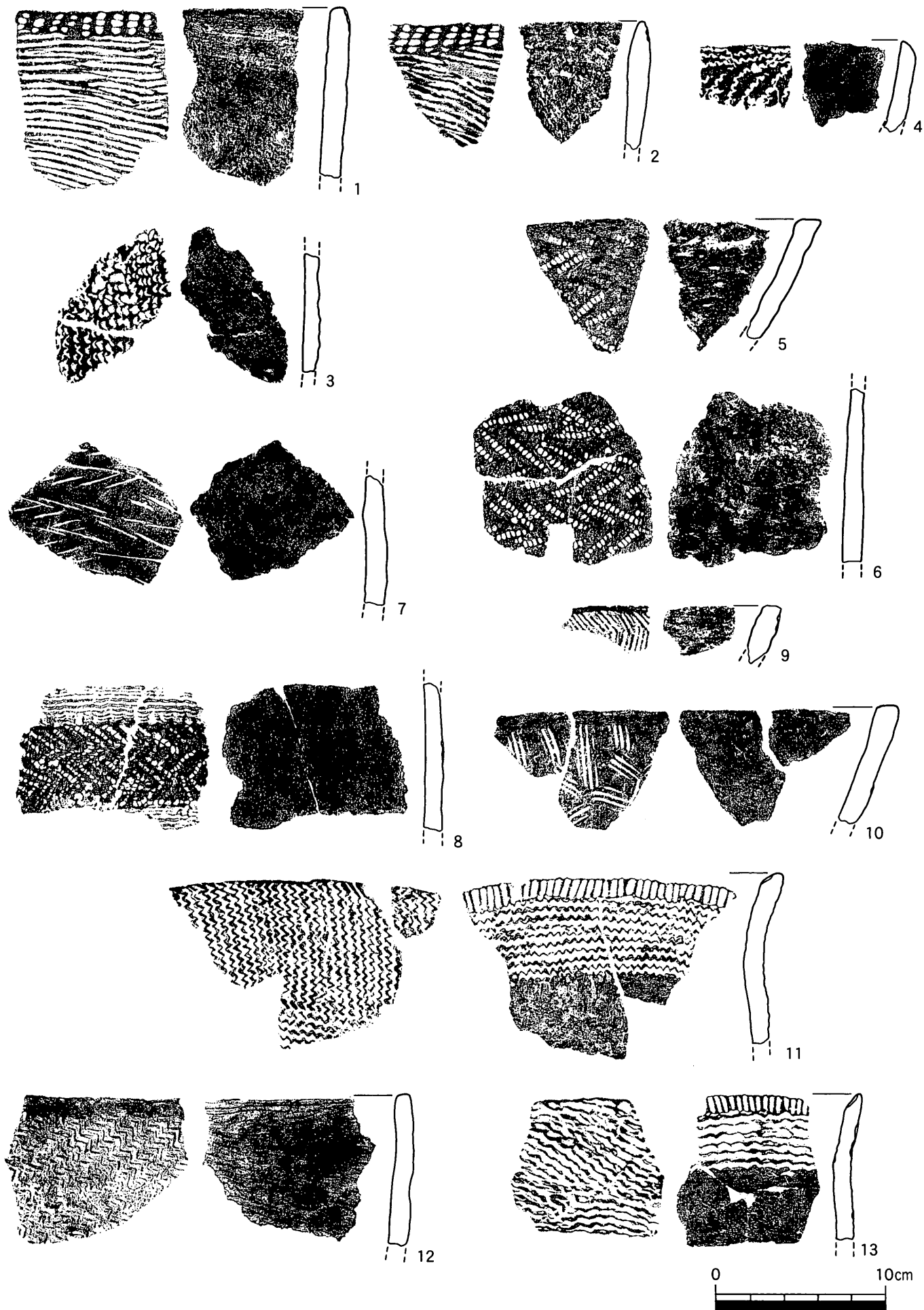
縄文時代早期については、当台地の他遺跡と同様に多量の遺物が出土し、集石遺構・陥し穴状遺構・土坑などが多数確認されているが、なかでも注目したいのがSC-4である。質・量ともに豊富なバリエーションを誇る当台地ではあるが、早期の住居跡は未だ確認例がない。それらしき遺構は幾つか確認されているが、今回のSC-4ほどに可能性を感じる遺構は他に無く、当台地初の竪穴式住居跡といえるかもしれない。但し、柱穴の問題等検討すべき課題は多く、先述の掘立柱建物群同様来年度以降の調査を踏まえうえて結論を出したいと思う。

旧石器時代については、石器は第7・第8層から出土し、礫群については第8層の最下部（まるでシラスにのるような状況）で2基検出された。礫群については隣の第3地区でも検出されたが、この時は第6層の最下部から第7層にかけての層で検出されたため、今回のSR-1・2とは使用時期が異なるのではないかと推測される。

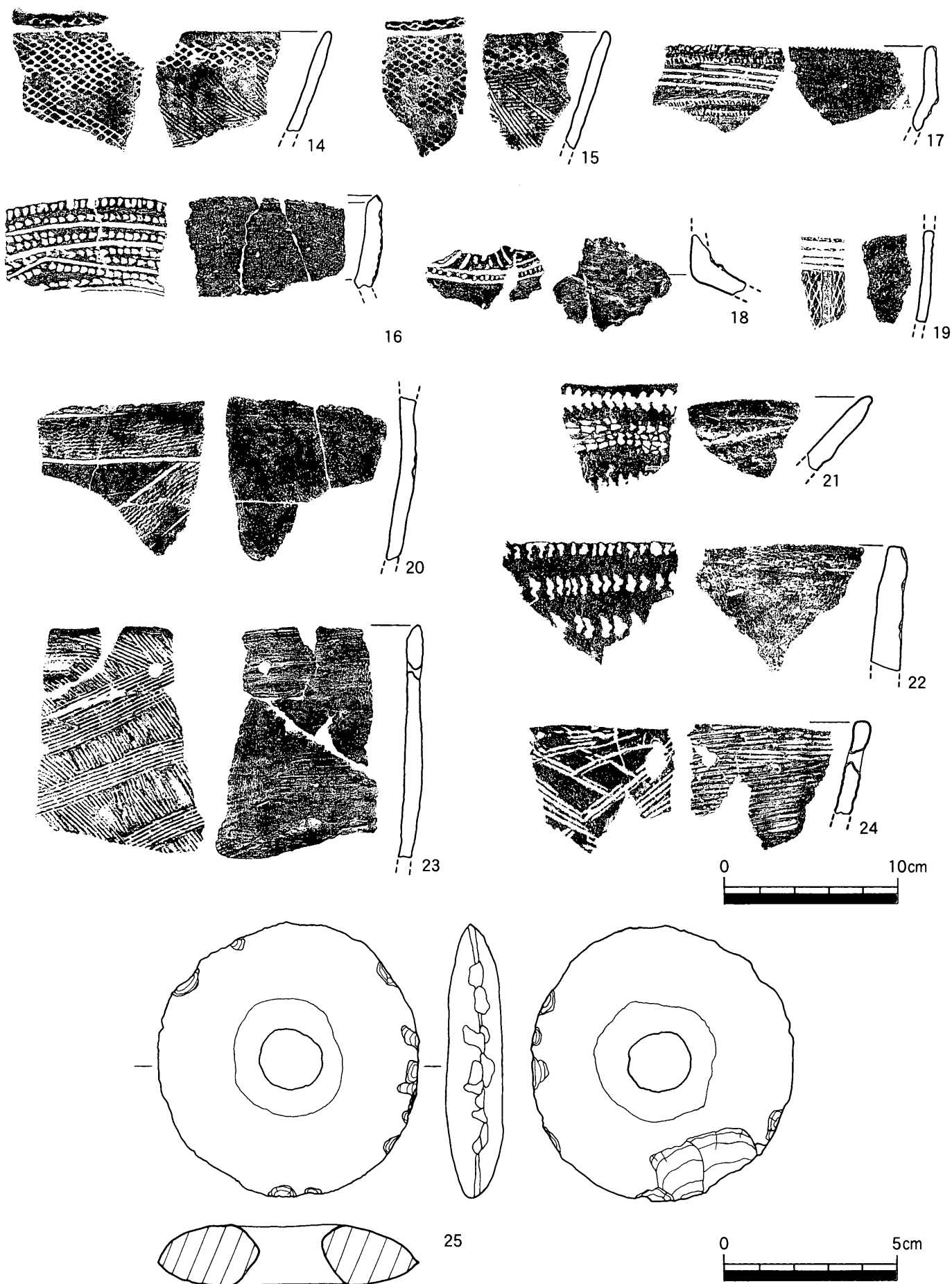
以上が今回調査を実施した上猪ノ原遺跡第4地区の現状における考察である。



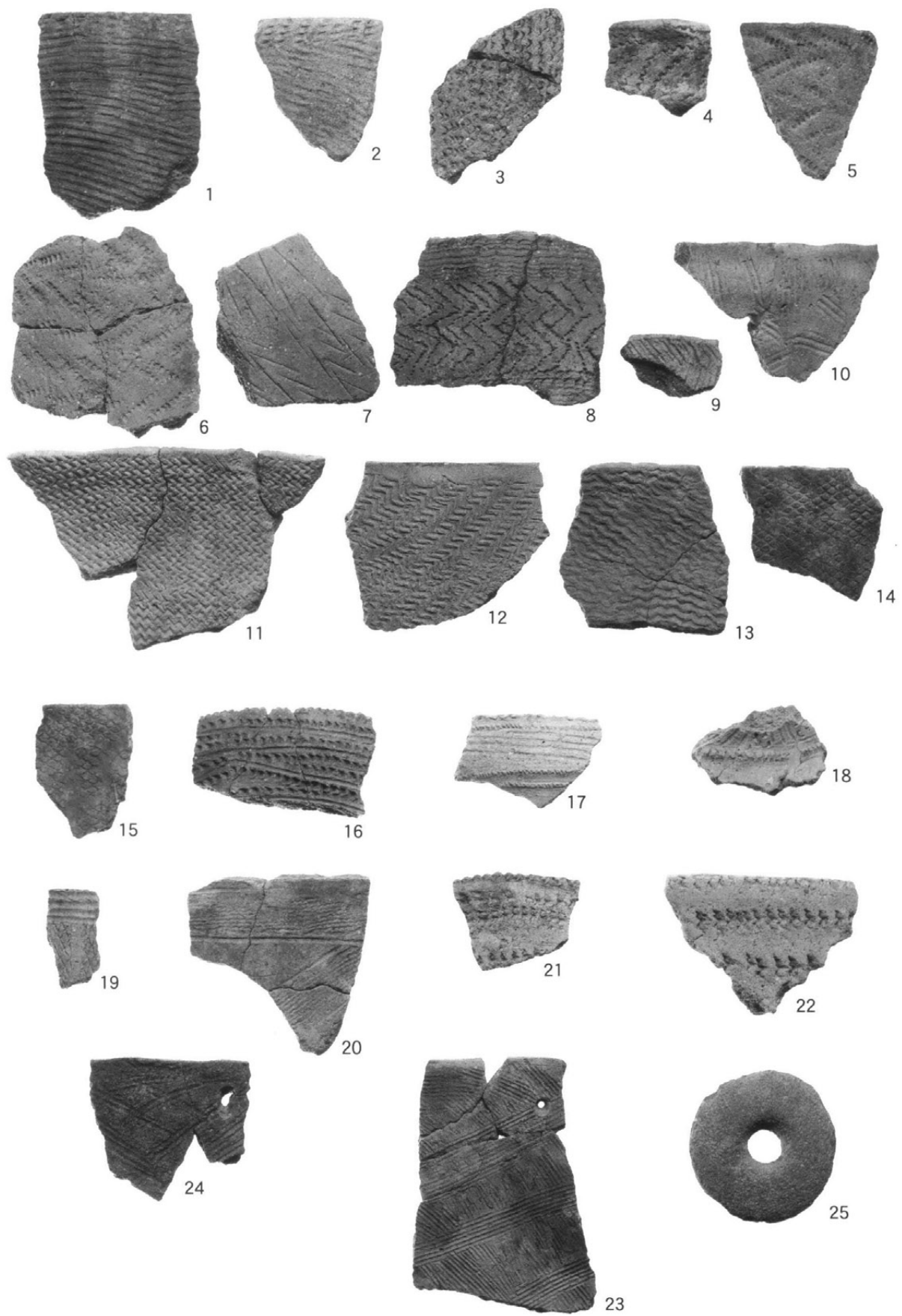
第11図 遺物分布図 (S = 1 / 500)



第12図 上猪ノ原第4地区出土遺物実測図① (S = 1 / 3)



第13图 上猪ノ原第4地区出土遺物実測図② (土器 S=1/3・石器 S=2/3)



図版17 上猪ノ原遺跡第4地区出土遺物

第Ⅲ章 下猪ノ原第2地区

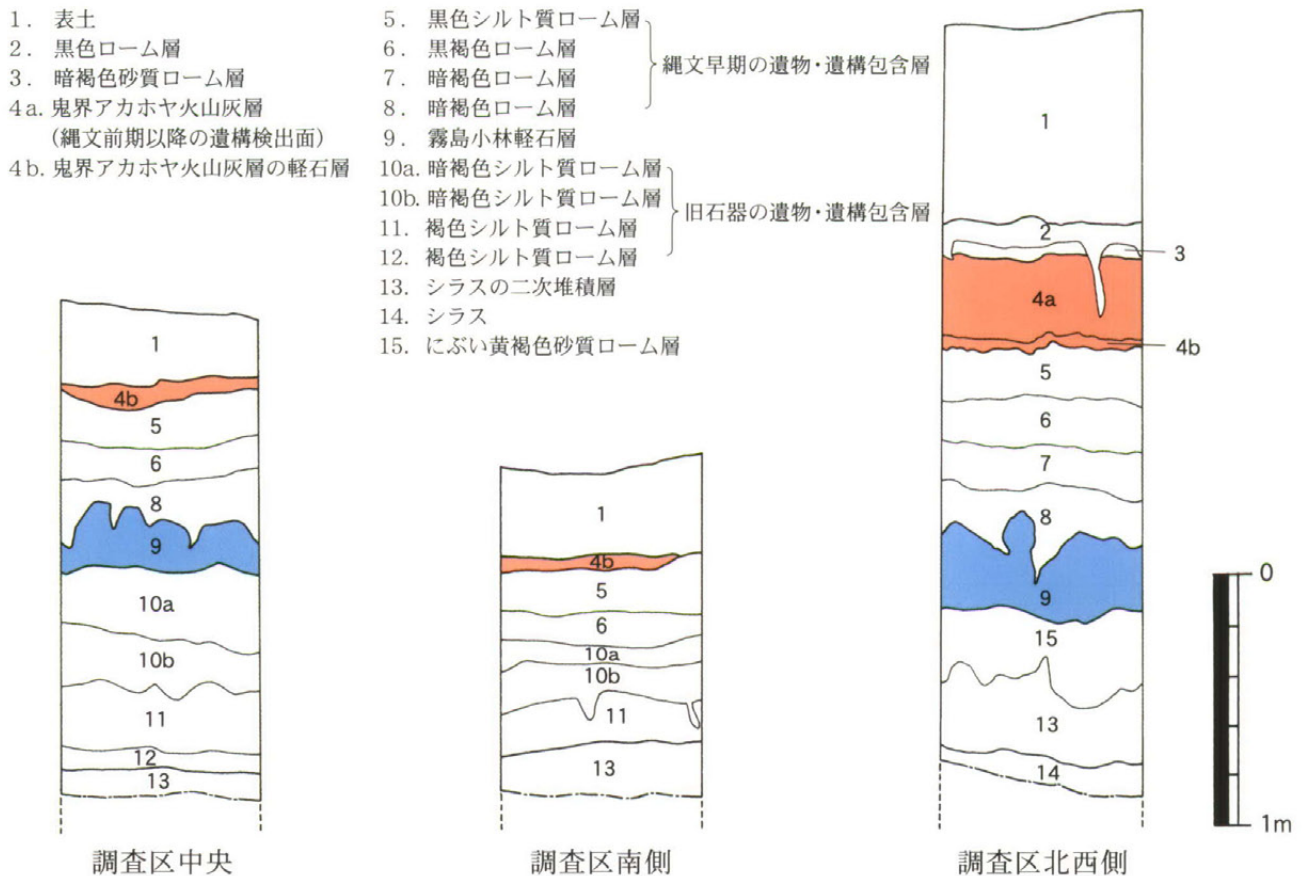
第1節 調査の概要と基本層序

前年度も本事業に伴い、下猪ノ原遺跡の発掘調査が行われた。前年度調査が行われた区域を第1地区とし、今年度調査が行なわれた区域を第2地区と設定した。

下猪ノ原遺跡第2地区の調査前は畑地であった。調査は人力による表土（耕作土）の除去から行った。調査区の東部と西部の一部に大きな削平が認められ、縄文早期の包含層まで削平をうけているところもあった。調査区の南側と北東部においては2次堆積のアカホヤ火山灰層（3層）・アカホヤ火山灰層（4層）が残存しており、弥生時代～近現代の遺構・遺物が確認された。

弥生時代～近現代の遺構の調査が終了した後、工事計画で深く掘り下げる範囲については、人力でアカホヤ火山灰層を除去し、アカホヤ火山灰層が堆積する直前の地形を把握するため5層上面にて等高線の記録作業を行った。その後人力により縄文時代早期の包含層を掘り下げ、縄文時代早期の遺構・遺物の調査を行った。

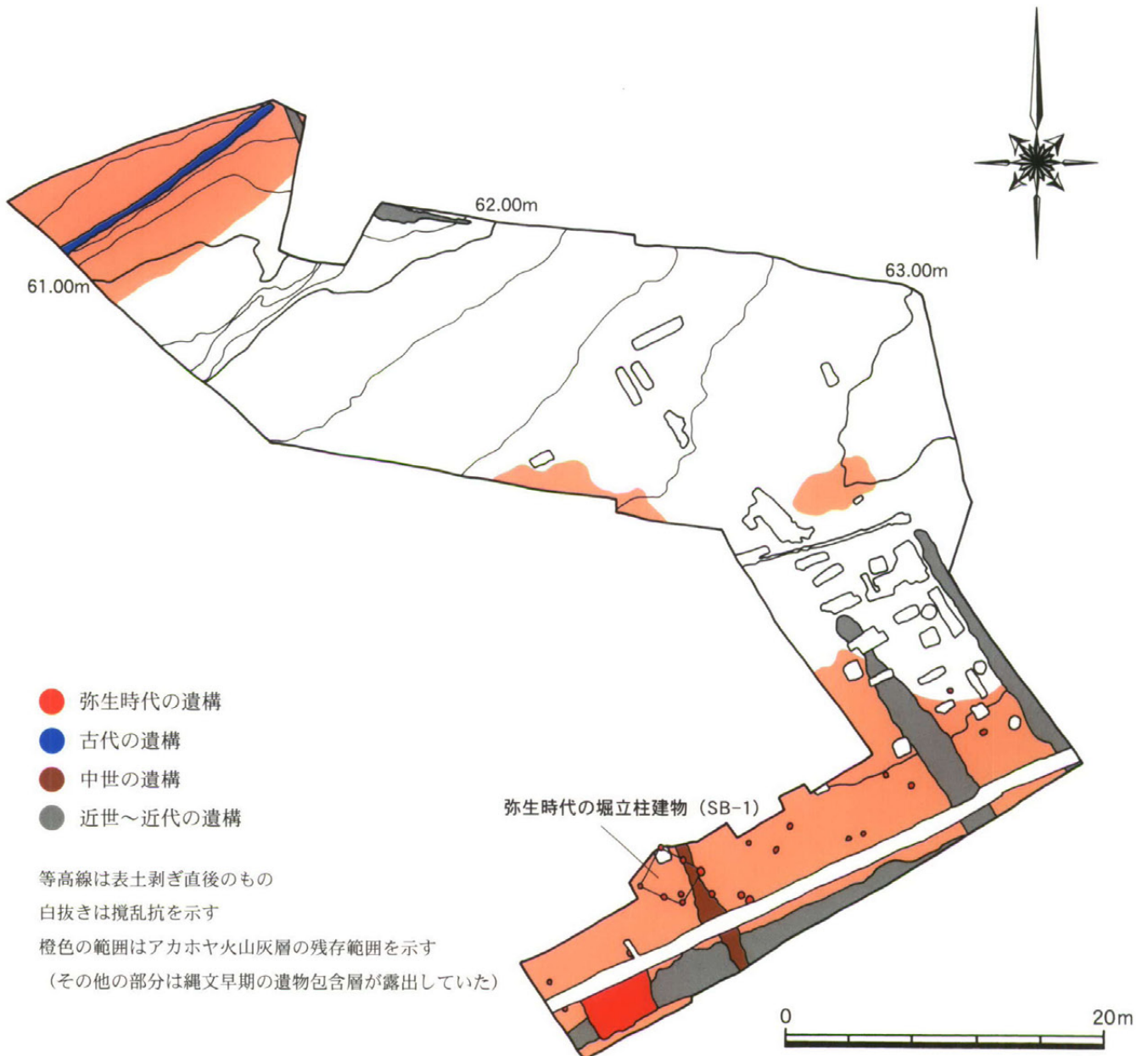
旧石器時代の調査については、縄文時代早期の包含層を完全に掘り終えた範囲にトレンチを設定し、人力によって旧石器時代の遺物包含層の掘り下げを行い、遺物が出土したトレンチを拡張しながら調査範囲を広げていった。



第14図 下猪ノ原遺跡第2地区土層模式図 (S = 1 / 30)

第2節 アカホヤ火山灰層上面の調査

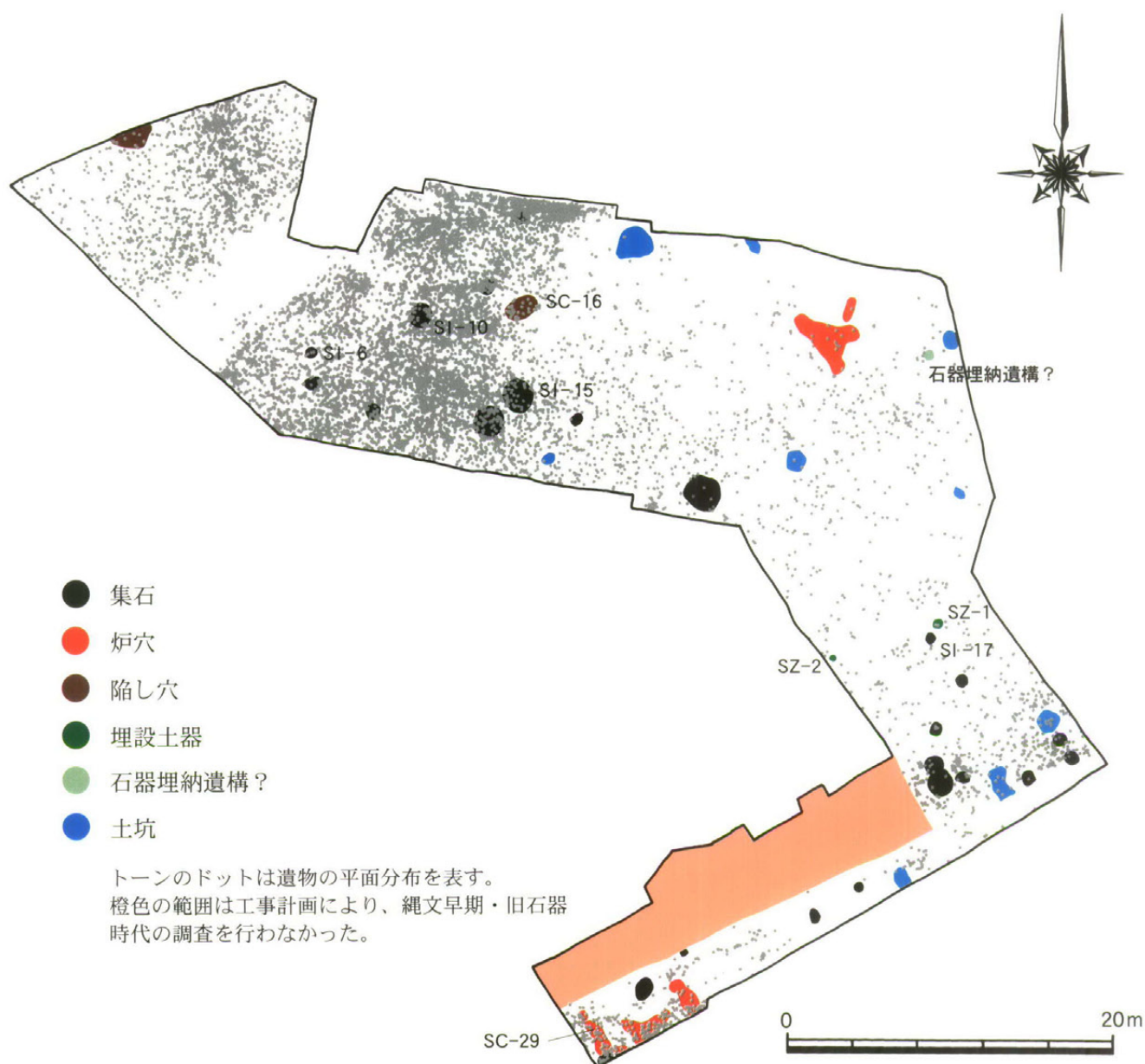
調査区の南側はアカホヤ火山灰層（4層）が残存していたものの、攪乱坑が多数存在しており、あまり良好な状態ではなかった。しかし、2次堆積のアカホヤ火山灰層（3層）中に弥生土器片・磨製石器片などが10数点出土し、また4層上面にて精査を行なったところ溝状遺構4条（近世～現代3条・中世1条）、道路状遺構2条（床面に硬化面が検出されたため道路状遺構と判断した：古代1条・不明1条）、掘立柱建物1軒（SB-1：弥生時代中期後半：図版18）、竪穴式住居跡1軒（弥生時代中期後半）、柱穴10数基が検出された。どの遺構も縄文時代早期の包含層まで掘り込まれており、縄文早期に該当する遺物が埋土中に多く混入する遺構もあった。攪乱を多く受けてはいたものの、本台地上において類例の少ない弥生時代の遺構が検出されるという成果があった。



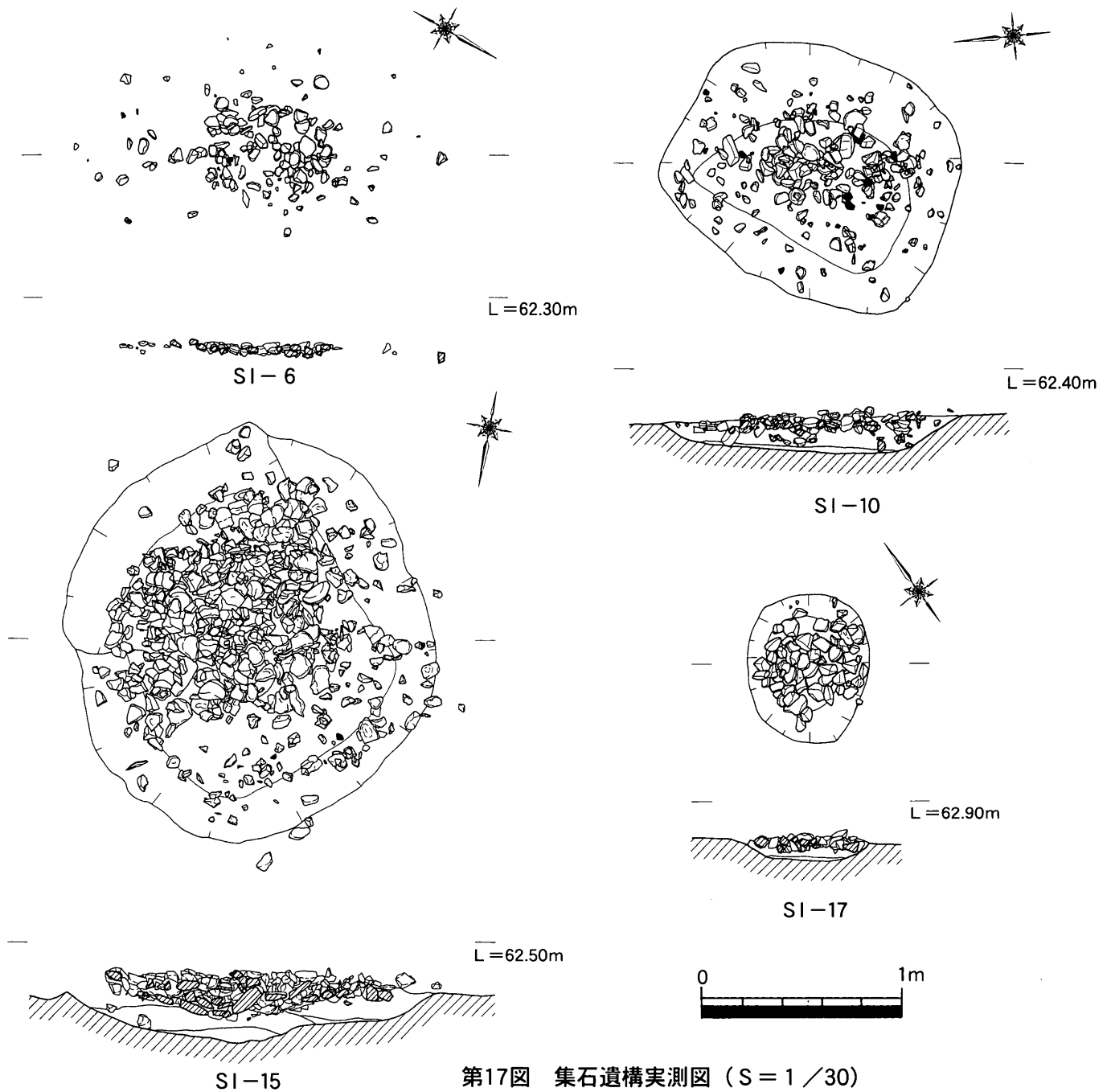
第15図 下猪ノ原遺跡第2地区4層上面遺構配置図（S = 1 / 400）

第2節 縄文時代早期の調査

アカホヤ火山灰層下位の5層から8層にかけて縄文時代早期の遺物・遺構が検出された・検出された遺構は集石遺構25基、炉穴11基（炉部を数える）、陥し穴状遺構2基、埋設土器2基、挟入石器の埋納遺構？1基（図版28）、土坑9基が検出された。本遺跡の調査区はコの字状を呈しており、その折れ曲がったところではあまり遺物が出土せず、調査区の両端部付近において遺物が集中するという特徴的な遺物の分布状況が確認された。未調査の部分があるものの遺物は地形的に高所となる調査区の東側を中心に環状に分布しているということが想定される。近年散見されている遺物の環状遺棄遺構と呼ばれるものであろうか。またこの環状遺棄遺構の内側において埋設土器、挟入石器の埋納遺構？が検出されている。環状遺棄遺構の遺物の大半は塞ノ神式土器を中心とする縄文時代早期後半の土器片であった。



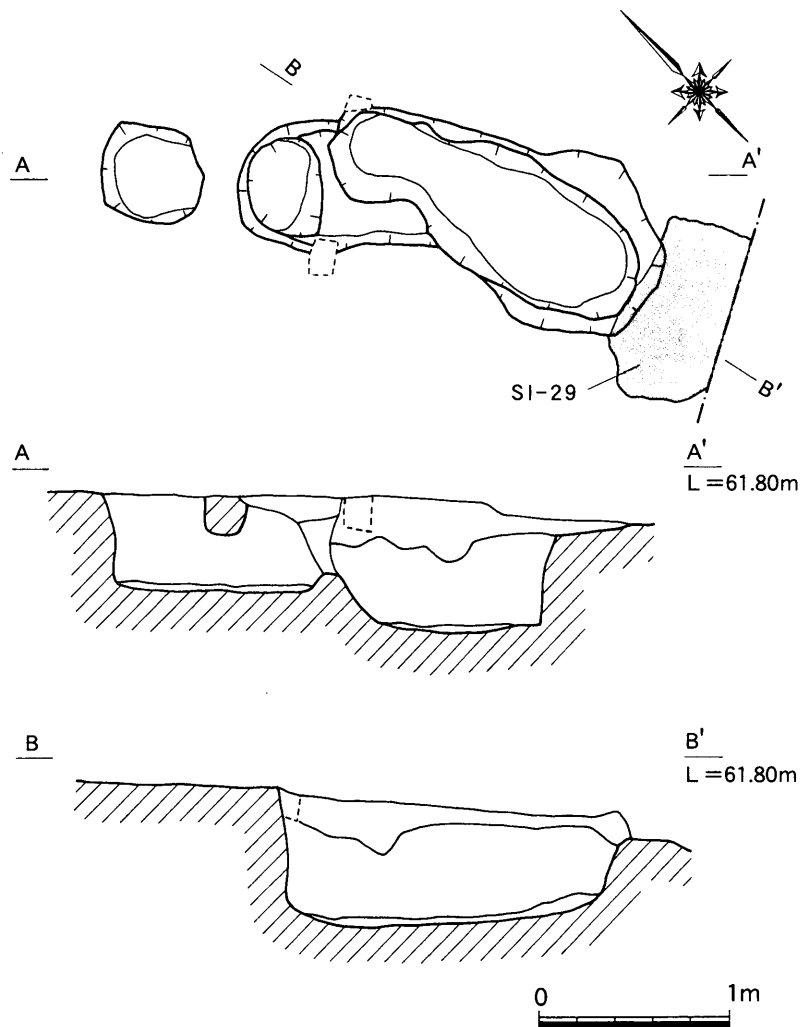
第16図 下猪ノ原遺跡第2地区縄文時代早期遺構配置及び遺物分布図（S = 1 / 400）



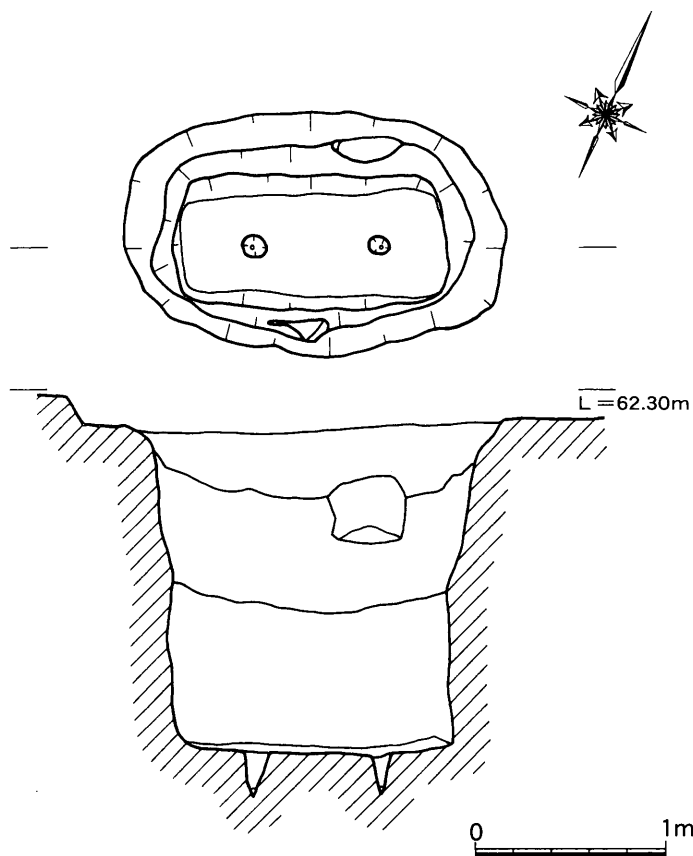
第17図 集石遺構実測図 (S = 1 / 30)

■集石遺構 (第17図)

集石遺構は5層から7層にかけて検出された。どの集石遺構もまず、焼礫が特に密集する箇所が存在することにより確認される。基本的な調査方法としては①礫の密集箇所及びその周辺に精査をおこない、掘り込みの有無を確認する。②掘り込みが確認できた場合は掘り込みの半截をおこなう。掘り込みの確認されなかった場合は現状での礫の範囲を見定め、礫の最も密集する箇所に中心線を設定して手前半分を掘り下げ、礫の検出を行なう。③礫の上部の土層を記録する。④礫の密集を全て検出し礫の平面写真の撮影後、礫の平面を半分実測する。⑤実測の終了した半分の礫を除去し、礫の断面見通しの記録を取る。⑥礫を全て除去し掘り込みのある場合は礫の下の土層を記録して、それから掘り込みの完掘を行いその記録を取る。掘り込みが確認されなかった場合は礫の除去後再度精査を行なって掘り込みの確認する。それでも確認できなかった場合はトレンチを設定し、土層断面にて掘り込みの確認をおこなう。以上のような流れで集石遺構の調査を行なった。



第18図 炉穴 (SC-29) 実測図 (S = 1/40)



第19図 陥し穴状遺構 (SC-16) 実測図 (S = 1/40)

SI-6は6層の上部で検出された。掘り込みの持たないタイプで礫の総数は157個、重量は8.1kgを量る。

SI-10は6層上部で検出された。不整楕円形プランの掘り込みを持つもので多数の遺物の混入が認められた。礫の総数は245個、重量17.1kgを量る。

SI-15は5層下部で検出された。不整円形プランを呈する二段の掘り込みを持つもので礫の総数は509個、重量135.5kgを量る。

SI-17は6層上部で検出された。楕円形プランの掘り込みを持つもので礫の総数74個、重量11kgを量る。

■炉穴 (第18図)

SC-29はその南側をSI-29 (集石遺構) に切られて8層下部にてSI-29の調査中に確認された。床面には焼土は検出されなかったが、埋土中に多量の焼土塊や炭化物粒の混入が見られたことやブリッジが確認されたことなどから炉穴であると考えられる。

燃焼部と考えられる部分が2ヶ所あるが、埋土からは切り合い関係を把握することはできなかった。おそらく南側のブリッジが崩落した後、北側に斜面を登るかのように拡張したものと考えられる。

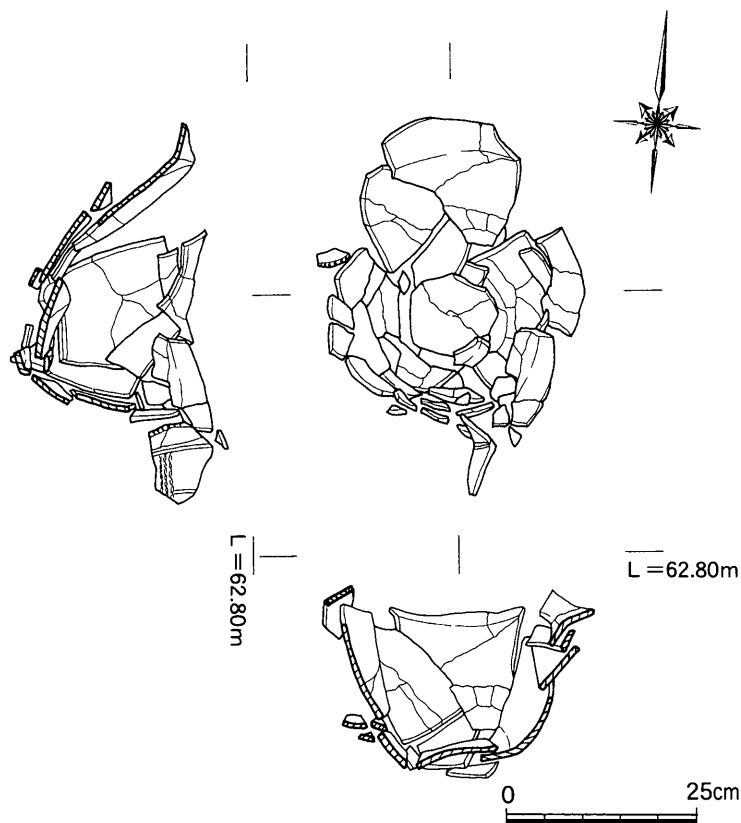
■陥し穴状遺構 (第19図)

SC-16は6層下部にて検出された。楕円形プランで壁面には2ヶ所のステップが確認され、床面中央には逆茂木の痕跡が長軸方向に2基並んで確認された。

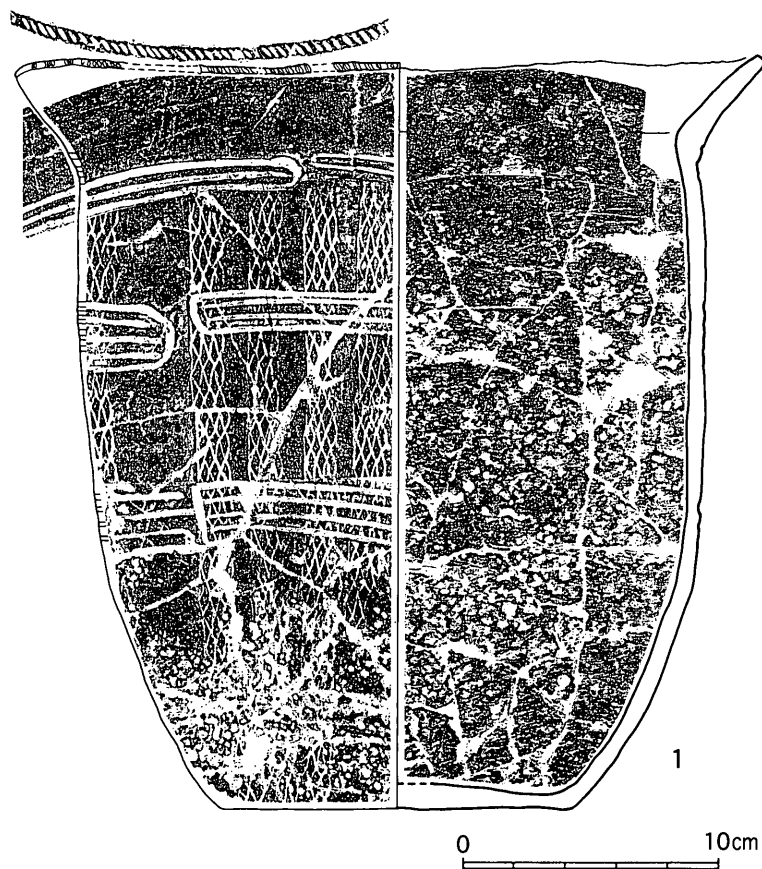
■埋設土器（第20～23図）

SZ-1は遺物の環状遺棄遺構の内側で検出された。5層の中部にて塞ノ神式の深鉢の口縁部が半周するかのような状況が確認された。その周囲を慎重に掘り進めると、一部口縁部は欠損しているものの頸部についてはほぼ完全に一周するかのような状況であったため、埋設土器の可能性を考え、頸部が検出された面で一度精査を行なって掘り込みを確認したが、プランの確認には至らなかった。土器自体のひび割れが著しい状況であったため、土器の内部の土を除去し上方からの写真撮影を行なった。その後埋設土器の出土状況の実測するとともに土器のスタンプを残しながら遺物の取り上げを行なった。遺物を取り上げた後、胴下半部付近から下の部位のスタンプを残したままの状態でもう一度精査を行なったが、掘り込みのプランは見られなかった。最終的にトレンチを設定して土層確認をおこなったところ土器のスタンプの近くで9層を縦に分断するかのような土層の堆積状況が確認された。この土層の堆積状況をどのように分析するかが今後の検討課題である。

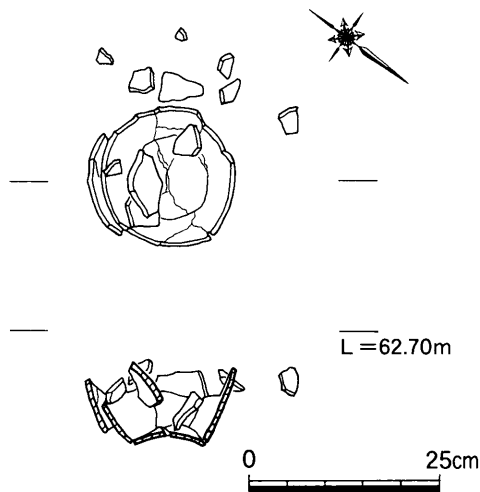
1はほぼ完存の塞ノ神式の深鉢である。口縁部は緩やかな波状口縁を呈する。焼成は良好で、外面には縦位に撚糸文の後横位に沈線文を施し、口縁端部には刻目が見られる。胴下半部の風化は特に著しい。また外面には炭化物の付着が多く認められる。



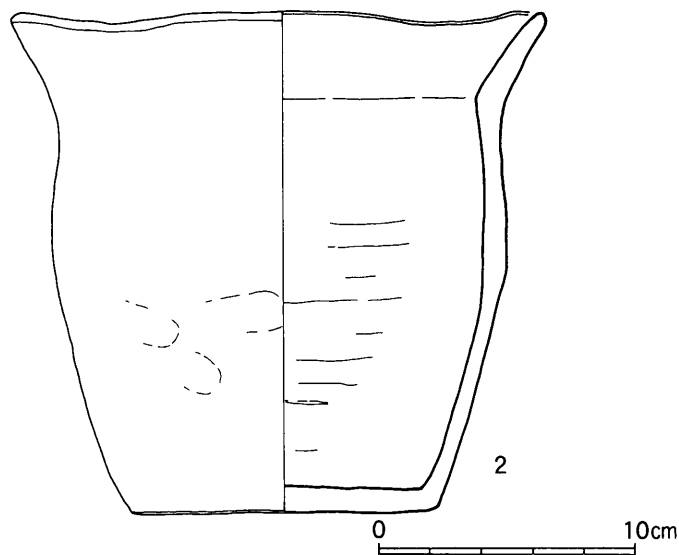
第20図 SZ-1実測図（S=1/10）



第21図 SZ-1出土遺物実測図（S=1/3）



第22図 SZ-2 実測図 (S = 1 / 10)



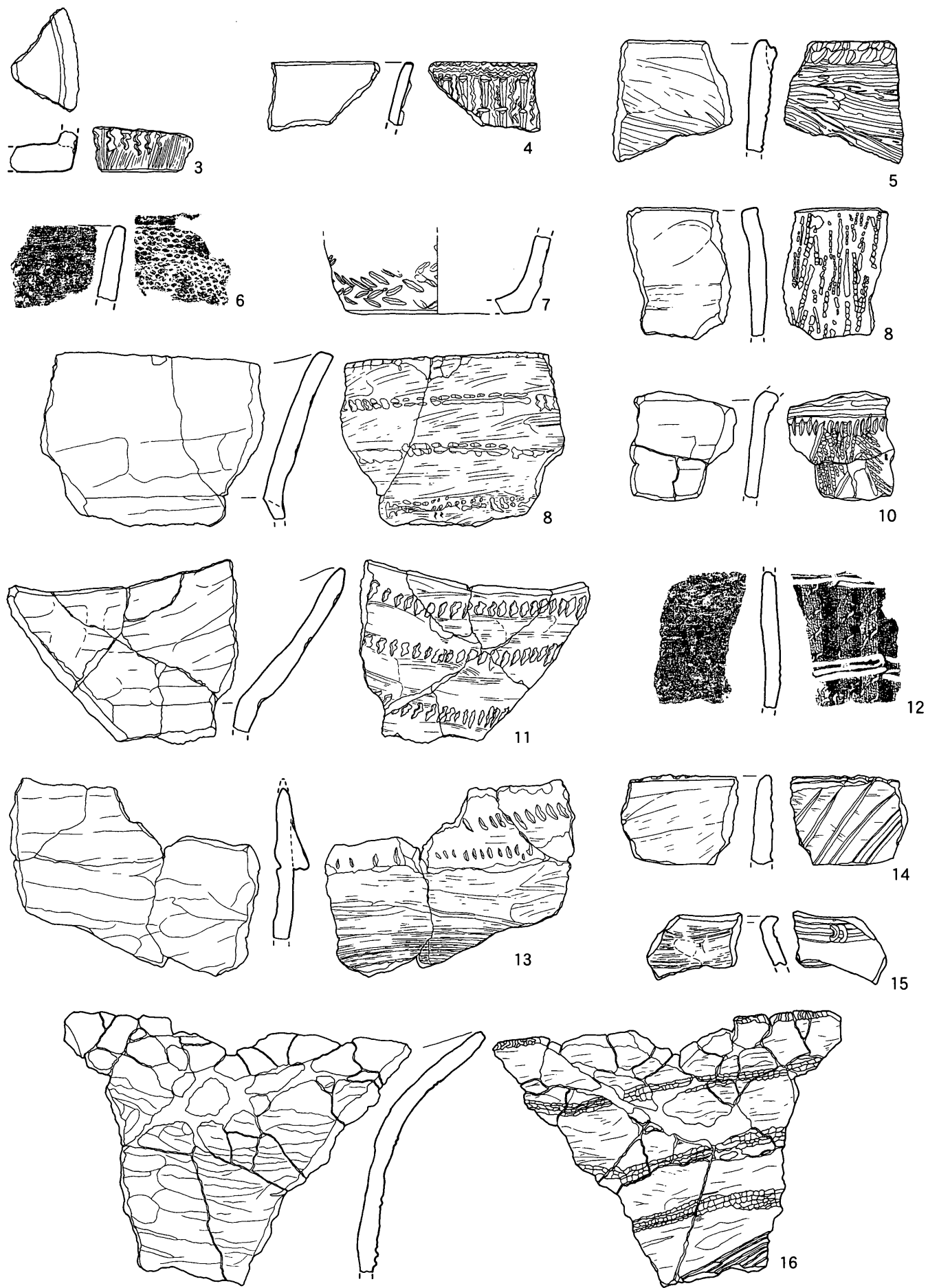
第23図 SZ-2 出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

SZ-2も遺物の環状遺棄遺構の内側で検出され、SZ-1から西側約6mのところに位置する。SZ-2が検出された付近は後世の削平をうけており、表土を除去すると縄文時代早期の包含層である5層の下部が露出する状況であった。その状況で包含層を数cm掘り下げたところひとかたまりの土器片と土器の胴部付近が一周する状況が検出されたので、SZ-1と同じく埋設土器を想定した。慎重に掘り下げを進めていくと土器の胴部～底部は完存しており直立する状況が確認された。また、その内側にも同一個体の破片が混入していた。胴下半部の完存が確認された段階で精査を行なったが掘り込みを確認することが出来なかった。そこで、土器を残したままトレンチを設定し、土層の確認をおこなったが掘り込みを示すような土層の堆積状況は観察されなかった。結局完存していた胴下半部の土器とその周りから出土したひとかたまりの土器片とは同一個体であり、口縁部～頸部の一部以外は復元することができた。

2は無文の塞ノ神式の深鉢である。口縁部～頸部の約4分の3は欠損するが、胴部から底部にかけては完存しており、図面上では完形に復元できる。口縁部は波状口縁で内外面ともにナデ調整を施す。残存する口縁部の一部に炭化物の付着が認められる。

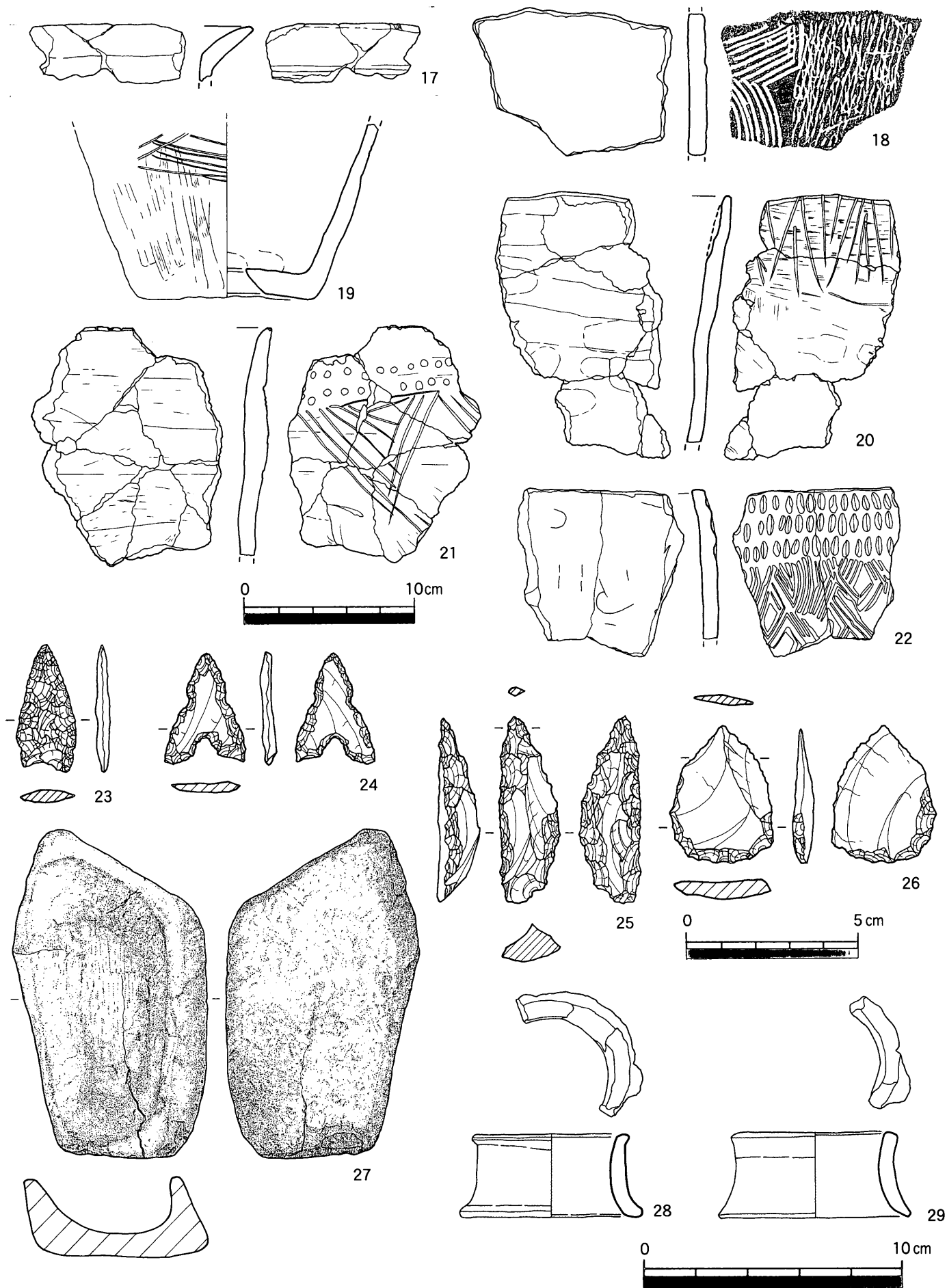
■縄文時代早期の包含層出土遺物 (第24・25図)

3は底部片で、外面は貝殻条痕の後に縦位の貝殻腹縁刺突文を施す。4は口縁部片で口縁端部には横位の貝殻復縁刺突文、その下には縦位の貝殻腹縁刺突文と楔形突起文を施す。5は口縁端部に二列の斜位の刺突文、その下は貝殻条痕文が施されている。6は小型の楕円押型文を施す。7は羽状の短沈線文の施された底部片である。8は縦位のクシ状工具による刺突文を施す。9・11・16は外面に貝殻による連続刺突文が施され、波状口縁を呈する口縁部片である。9には口縁端部にも貝殻による刺突文が施されている。10は沈線文に区画された模様の中に縄文を施文する。また頸部の下に横位の爪形の刺突文が施されている。12は縦位の撚糸文を連続的に施文した後に沈線文を施す。13は口縁端部よりやや下の部分を肥厚させ横位に爪形の刺突文を施している。14は口縁端部に刻目を施し、その下には斜位の沈線文を施す。15は壺形土器の口縁部片である。口縁端部の下に横位の沈線文が施されている。17は頸部に沈線文、不明瞭だが口縁端部には刻目を施す。18は縦



第24图 下猪ノ原第2地区出土遺物実測図① (S=1/3)





第25図 下猪ノ原第2地区出土遺物実測図② (S=1/3・2/3・1/2)

位の撚糸文と幾何学的な沈線文を施す。19は底部片で底部に焼成後の穿孔が見られる。外面の調整は縦位の削りの後ナデ調整を行い、沈線文を施す。20は口縁部に山形の沈線文を施す。21はやや外反する口縁部を持ち、その頸部付近に横位の円形の刺突文を施し、その下には山形の沈線文を施す。22は口縁部に横位の三列の楕円形刺突文を施し、その下に貝殻条痕により幾何学的な模様を施文する。

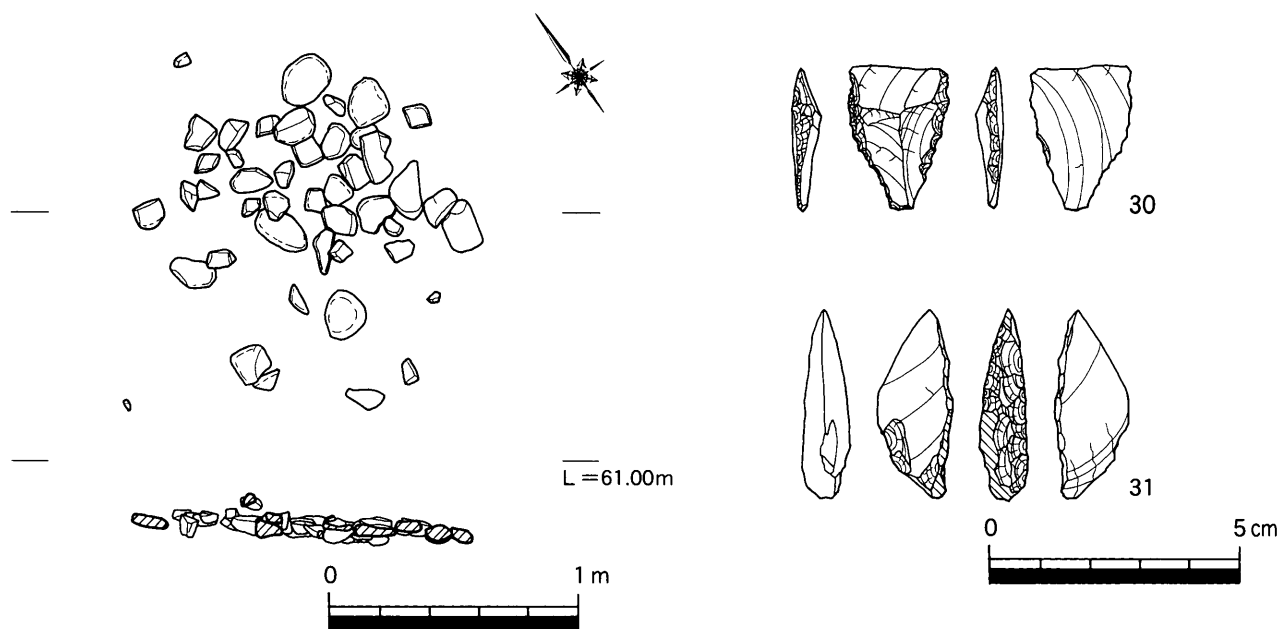
23・24は打製石鏃である。23は帖地型と呼ばれるもので屈曲部の下に抉りを入れている。24は素材剥片の剥離面を大きく残し、脚部と尖頭部の境目に抉りを入れている。25は槍先形尖頭器で左右非対象の平面形をしている。また素材剥片の剥離面を多く残す。この資料は近世～近代にかけての溝状遺構の埋土中から出土した。その溝状遺構の床面は縄文時代早期の包含層まで達しており、本資料は縄文早期のものと考えられる。26は素材剥片の剥離面を大きく残して基部にのみ調整を行い、上半部には調整を行っていない。石鏃より大きくずんぐりとした平面形から尖頭状石器と考えられる。27は砂岩製の石製品である。比熱をうけており表面は赤く、裏面は黒く変色している。真ん中が広く凹んでいるが、凹みの一部は注ぎ口のようにゆるやかになっている。28・29は耳栓である。両者ともに輪状耳栓で内外面に赤色顔料が塗布されている。

第4節 旧石器時代の調査（第26・27図）

旧石器時代の遺物は10層～12層にかけてナイフ形石器・台形様石器・剥片・石核などが出土した。遺構は礫群が11層下部から5基と15層中から1基検出されている。15層は北東側の斜面にのみ確認された層であり、11層との対比が難しいが、シラスの二次堆積層の直上にあることから本遺跡の旧石器時代の遺物・遺構は1つの文化層のものと考えておきたい。今後、遺構・遺物・礫の平面分布・断面分布・接合関係などを分析して正確な検討を行ないたい。

SR-1は北東部に礫が集中し、ほぼ円形を呈する。礫の総数は50個で重量は17.1kgを量る。

30は台形様石器である。求心状に剥片剥離をされた不定形な剥片を素材とする。31はナイフ形石器である。節理面により割れた剥片の一部を素材としている。



第26図 礫群 (SR-1) 実測図 (S = 1 / 30)

第27図 下猪ノ原遺跡第2地区出土遺物実測図③ (S = 2 / 3)

第5節 まとめ

下猪ノ原遺跡第2地区は道路及び排水路部分の限られた調査範囲であったものの旧石器時代から近代までの時期幅の広い遺構・遺物が確認された。特に縄文時代早期の遺構・遺物は突出している。現在の状況では情報量が多すぎてまとめることが出来ていない。今後の本報告に向けての整理作業の課題と埋設土器の検出についての考察を述べることにより、今回のまとめとする。

本遺跡における縄文時代早期の最大の特徴は埋設土器と遺物の環状遺棄遺構の検出である。この本報告に向けての主な課題としては①環状遺棄遺構内の遺物の接合関係を把握すること。②埋設土器についての考察（環状遺棄遺構との空間配置・土器の状態・付着している炭化物の自然化学分析等）を行なうこと。③今回触れることの出来なかった抉入石器の埋納遺構？の検討。④環状遺棄遺構内の遺物とそれから外れる遺物の特徴を検討すること。⑤環状遺棄遺構とその他の遺構の関係を検討することなどがあげられるであろう。その他にも集石と炉穴の分布と包含層中から出土した複数の型式にわたる土器の分布状況を重ね合わせて、遺構と遺物の関係を検討し、本遺跡での縄文早期における変遷を明らかにすることも必要である。

埋設土器とは土坑に埋められて何らかに使用された土器ということで、埋設の根拠には土器を埋めた掘り込みの存在が必要である。下猪ノ原遺跡第2地区の資料は明確な掘り込みが検出されていないので埋設土器と断定する根拠としては不十分といえる。しかし、埋設土器の掘り込みのプランは土器よりひとまわり大きいだけのものが多く、その検出が難しい。また近年縄文早期の遺構は存在するが検出できない（見えない遺構が存在する可能性）という指摘もある。これらの指摘や深鉢が完存し直立するという状況、他の遺跡での検出例（鹿児島県上野原遺跡・城ヶ尾遺跡）からみた遺物分布状況との関係（遺物の集中する箇所から埋設土器は外れて存在する）、立地条件（地形的に高所な場所に存在する）、土器自体が比熱をうけた痕跡が確認されることなどを考慮すると本遺跡の資料についても埋設土器と考えられるであろう。今回検出された埋設土器はあらためて縄文早期の遺構のプランが確認できない（非常に見えにくい）状況があるということを示す材料にもなると思われる。

宮崎県内での埋設土器と考えられる資料は散見されるが埋設土器としての報告例はない。近年埋設土器の存在が明らかになったことや、前述したが埋設の根拠となる土器を埋めた掘り込みの検出が条件にあげられていることなどがその要因であると考えられる。しかし、掘り込みがみえないから埋設土器ではないということではなく、一箇所に同一個体の土器が出土しほぼ完存品として復元できる場合や土器の底部が直立した状態で出土した場合などは掘り込みの検出以外にもその出土状況や土器そのものを十分に検討することにより、埋設土器と考えられる条件を引き出せることもあるだろう。今後、埋設土器の報告例が増加することを期待する。

本遺跡の発掘調査では改めて遺物の包含層に内在する情報量とそれをどれだけ引き出すことができたのかということを考えさせられたものであった。この経験を今後の調査や整理作業で活かしていきたいと思う。

下猪ノ原遺跡第2地区出土土器観察表

番号	残存部位	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	調整・文様		調整・文様		備考
						外 面	内 面	外 面	内 面	
1	完存(深鉢)	SZ-1	29.15	29.5	13.85	燃糸文・沈線文	貝殻条痕の後ナデ	褐	にぶい褐	塞ノ神式
2	完形(深鉢)	SZ-2	20.7	19.3	12.5	横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい褐	灰黄褐	塞ノ神式
3	底部片	6層				貝殻条痕文・貝殻刺突文	ナデ	にぶい褐	にぶい赤褐	知覧式
4	口縁部片	5層				貝殻刺突文・楔形突起文	横ナデ	褐	にぶい褐	知覧式
5	口縁部片	6層				刺突文・貝殻条痕文	貝殻条痕文・ナデ	にぶい褐	にぶい褐	前平式
6	口縁部片	5層				楕円押型文	ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	楕円押型文
7	底部片	6層			10.6	短沈線文・丁寧なナデ	丁寧なナデ	灰褐	灰褐	桑ノ丸式
8	口縁部片	6層				クシ状工具による刺突文	貝殻条痕の後ナデ	にぶい黄褐	赤灰	下剥峯式
9	口縁～頸部片	5層				貝殻腹縁連続刺突文	貝殻条痕・ナデ	灰黄褐	灰黄褐	塞ノ神式
10	頸部片	6層				沈線文・刺突文・縄文	ナデ	にぶい橙	にぶい褐	塞ノ神式
11	口縁～頸部片	5層				貝殻腹縁連続刺突文	貝殻条痕の後ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	塞ノ神式
12	胴部片	6層				燃糸文・沈線文	ナデ	黄灰	灰黄褐	塞ノ神式
13	口縁部片	6層				刺突文・貝殻条痕	削りの後ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	
14	口縁部片	5層				沈線文・口唇刻目	削りの後ナデ	にぶい褐	褐	塞ノ神式
15	口縁部片(壺)	6層				沈線文・ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	塞ノ神式
16	口縁部片	6層				貝殻腹縁連続刺突文	貝殻条痕の後ナデ	灰褐	褐	塞ノ神式
17	口縁～頸部片	6層				沈線文・ナデ	横ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	塞ノ神式
18	胴部片	5層				燃糸文・沈線文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	塞ノ神式
19	胴部～底部片	5層				縦位の削りの後ナデ	指押さえの後ナデ	にぶい黄褐	赤灰	塞ノ神式
20	口縁～胴部片	5層				沈線文・ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	
21	口縁～胴部片	5+6層				沈線文・刺突文	貝殻条痕の後ナデ	褐	褐	
22	口縁～胴部片	5層				刺突文・条痕文	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	

下猪ノ原遺跡第2地区出土石器・石製品・土製品計測表

番号	種類	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石 材	備 考
23	打製石鏃	6層	3.65	1.7	0.35	2	チャート	帖地型
24	打製石鏃	5層	3.2	2.4	0.45	1.8	頁岩	
25	尖頭器	SE-2埋土中	5.3	1.8	1.1	8.5	頁岩	縄文早期の所在
26	尖頭状石器	6層	3.9	3	0.65	5.6	砂岩	
27	石製品	5層	12.7	7.15	3.1	310.3	砂岩	
28	耳栓	6層	3.2	7		18.4	土製品	輪状耳栓・丹塗り
29	耳栓	6層	3.3	7.4		10.9	土製品	輪状耳栓・丹塗り
30	台形様石器	11層	2.8	2	0.6	2.7	頁岩	
31	ナイフ形石器	11層	3.7	1.5	1	3.7	頁岩	



図版18 SB-1



図版19 SI-6



図版20 SI-10



図版21 SI-15



図版22 SI-17



図版23 SC-29 ブリッジ



図版24 SC-16



図版25
SC-29



図版26 SZ-1



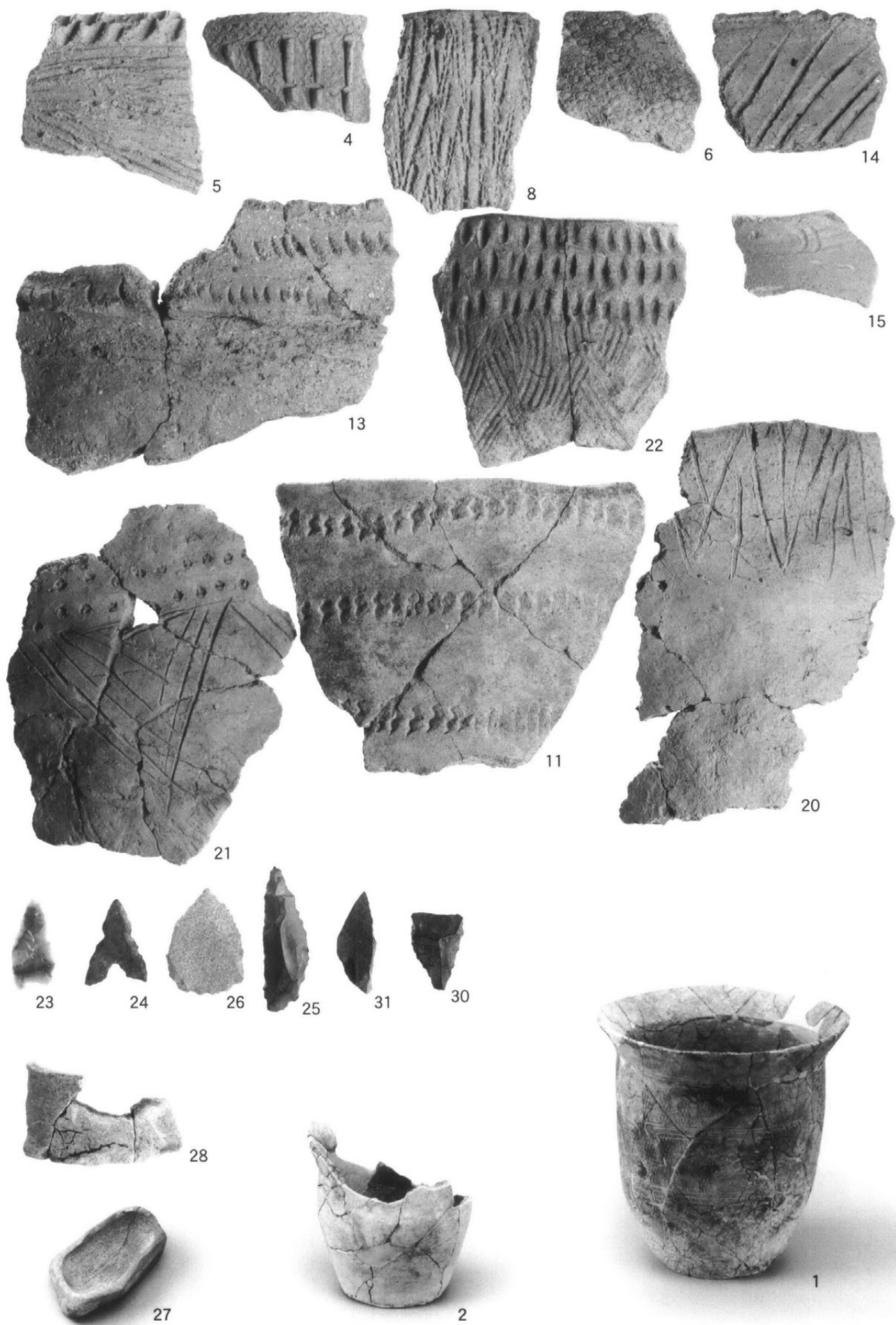
図版27 SZ-2



図版28 石器埋納遺構？



図版29 SR-1



图版30 下猪ノ原第2地区出土遺物

調 査 抄 録

フリガナ	カミノノハル シミノノハル				
書名	上猪ノ原遺跡-4-・下猪ノ原遺跡-2-				
副書名	県営農地保全整備事業船引工区にかかる埋蔵文化財調査概要報告書				
巻次	第1集				
シリーズ名	清武町埋蔵文化財調査報告書				
シリーズ番号	第17集				
編集者名	井田篤・秋成雅博				
発行機関	清武町教育委員会				
所在地	宮崎県宮崎郡清武町大字船引204番地				
発行年月日	2005年3月				
所在遺跡名	所在地	市町村：遺跡番号	北緯	東緯	調査期間
上猪ノ原遺跡 (第4地区)	清武町大字船 引字上猪ノ原	清武町：205	31° 51' 57"	131° 22' 21"	2003/9/22) 2004/7/23
下猪ノ原遺跡 (第2地区)	清武町大字船 引字下猪ノ原	清武町：204	31° 52' 05"	131° 22' 22"	2004/4/26) 2005/2/17
調査面積	調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
1,300㎡	農業関連	集落	旧石器・縄文 早期・中世	掘立柱建物・ 集石遺構・陥 し穴・埋設土 器など	縄文土器(早 期) 石器など
1,200㎡		集落	旧石器・縄文 早期・弥生・ 中世・近世	集石遺構・陥 し穴・炉穴・ 埋設土器など	縄文土器(早 期) 石器など
特 記 事 項					
<p style="text-align: center;">両遺跡で埋設土器が計3例確認されている。 縄文時代早期の完形の環状石斧の出土例(上猪ノ原遺跡第4地区)。</p>					

清武町埋蔵文化財調査報告書 第17集

上猪ノ原遺跡－4－
下猪ノ原遺跡－2－

県営農地保全整備事業船引工区にかかる
埋蔵文化財調査概要報告書

発行年月日 平成17年3月29日

編集発行 清武町教育委員会
〒889-1696 宮崎県宮崎郡清武町大字船引204
TEL 0985-85-1111

印刷 株式会社アートカラー
〒889-1605 宮崎県宮崎郡清武町加納甲2386
TEL 0985-85-2488
FAX 0985-55-6062
